

愛媛大学教育学部

第124号

同窓会報



愛媛大学教育学部同窓会事務局

☎ 790-8577 松山市文京町3番
愛媛大学教育学部総務係室内

☎ (089)927-9383(直通) FAX(089)927-8304

E-mail : dosokai@ed.ehime-u.ac.jp

少子高齢化と教育



愛媛大学教育学部
同窓会会長
高橋 治郎

同窓会会員の皆様方におかれましては、お元気にご活躍のことと拝察いたします。昨年の夏、同窓会懇親会が開催されましたが、「おー、元気にしよるかな」の挨拶後、楽しいひとときを持つことができました（詳しくは同窓会報前号）。来年夏の同窓会懇親会にも大勢の同窓生のご参加をお待ちしています。

三月には卒業式・終了式があり、新入正会員が、また、四月には新入生を迎え準備会員が同窓会に加わりました。年々、会員数が増え大所帯になってきている教育学部同窓会ですが、様々な職種に就かれている、また、ご退職された会員の皆様へどういった情報をお知らせ

せし、どう同窓会を運営するのが良いのが現在、悩ましい課題となっています。教職に就く卒業生の割合が激減しているものですが……。どうぞ忌憚のないご意見・ご提言をお寄せいただければ幸いです。

四月、新年度になり徐々に春らしくなりました。桜の開花宣言後、満開を楽しみにしていました。雨がたたられ花見は断念、残念……、それでも新緑が目まぶしい今日この頃です。「今年はタケノコが不作だ」などを話題にしながら昨日快晴のもと、地域の「井手掘り」をおこないました。参加者は高齢者ばかりで、若者はほとんどいませんでした。もっとも、私の所属している組（上ノ町組という町内会です。念のため）は老人ばかりで子どもは巣立っていて、いません。夜、組寄りがあり、飲食をしながら、小学生が夕方、放送する「〇〇小学校のよい子の皆さん、お約束の六時が参りました、どんなに楽しく遊んでい

ても、はやくお家へ帰ってお手伝いや勉強をいたしましょう」が話題の一つになりました。曰く、「外で遊んでいる小学生は今時はない」、曰く、「家で手伝いといっても何がある?」、「六時でもないのに六時が参りました、と言われるも……」、「六時が参りましたの参りました、六時になりました、で良いんじゃない」、「読み上げる文面、三十年ぐらい同じものじゃない」等々。さらに、「もうすぐ体力的に井手掘りや道づくりに出られなくなる」という話になり、「うー」とため息。着実に高齢化が進んでいる集落に住んでいることを再認識した次第です。

ところで、愛媛大学が発足した昭和二十四年生まれの私たちは、(最後の)団塊の世代と呼ばれる二百四十万人くらいいるのですが、最近はその世代が百万人を切っています。こうした少子化のため、各地で廃校が増え、それに伴い教員数が激減しています。ですから、教員養成学部としての我が愛媛大学教育学部も大変です。教員になりたくてもなれないのです。また、学部の入学定員と大学教員が減らされ、さらに「小学校教員養成に特化せよ」ということで中・高の教員免許を出すための授業科目が開講できなくなっています。

もつともすでに「音楽」は「特音」がなくなつて以降、学校教育はもとより地域の音楽文化活動にも支障を来しています。また、「体育」もそうです。教育学部で幼・小・中・高の教員免許を取得できるようにはしておかなければならないのですが……。

「教育」は次世代を担う青少年の育成のためにおこなうものであり、当然、お金と時間がかかります。ところが今日、教育や研究にお金をかけない政策が続き、幼稚園から大学まで疲弊しています。まずは、校・園の教員を増やし教員の「多忙(過労働務)」を軽減しなければなりません。大学も運営費・交付金が平成十六年以来、毎年一パーセントずつ減らされ、大学運営に支障を来しています。特に文系学部が、その中でも教育学部が危機的状況下にあります。

さて、教育学部同窓会として、少子化時代における「学校教育」そして「地域教育」に何らかの貢献ができないものか、また、どう教育学部を応援することができるか、検討しているところです。このことについても同窓生の皆様からのご意見・ご教示をいただければありがたいのですが……。これからも同窓会の運営、活性化にご協力お願いします。

表紙

- 「地層」……………兵頭 一夫
- 題字 元愛大教育学部教授 菊川 國夫
- 「少子高齢化と教育」……………(1) 教育学部同窓会会長 高橋 治郎

心 響

- 「褒める叱るは、生き方の投影であり全人間性のある行為である」……………(2) 石丸 淳

学部は今

- 教職支援ルーム……………(3)
- 学内最近のニュース……………(5)

- ・松山市「3年教職経験者研修」で教職大学院・院生が講師を務めました
- ・教育学部留学生歓迎会を開催しました
- ・愛媛県教育委員会との連携講座を開催しました

- ・教育学部学生が伊予市立下灘小学校を訪問しました

- 職場だより……………(7)
- 「これまでを振り返って」……………(7) 今治市・富田小教諭……………松本 一真

- 「私の強み」……………(7) 松山市・清水小教諭……………森元愛咲子

- 「人生の『あいうえお』」……………(7) 伊予市・郡中小教諭……………玉川 治佳

- 「初心忘るべからず」……………(7) 松山市・附属小教諭……………今永 晴香

- 「コンピュータとじゃんけん」……………(7) 四国中央市・三島南中教諭 大西 智晴



目次

褒める叱るは、生き方の投影であり全人間性 の出来る行為である

石丸 淳

(昭三六卒)

新採、日本の最良時代の一片。
一 相手の予想を超える
四月五日早朝、電報が来た。「職員会です。すぐ来られよ」。

血の気が退いた。カバン一つで飛び出た。初任地は肱川の支流小田川沿いの小さな町のA中学校。まだ、一度も尋ねていない。

予讃線下り、U町行き乗換五郎駅で突然「あら、淳さん。」と呼ばれ振り返ると、愛大附中のF先生が訝しげな顔で覗き込んでいる。

事情を話したが、愕かれ唸り声、暫く黙っていて、「淳さんは、大物かも知れんね。」と笑った。私も笑うしかなかった。呆れたらうと思つたが、なぜか嬉しかった。

後、雑談して別れたが、二三歩行き振り返り、「淳さん、殴られるのはいいが、生徒を殴つてはいけんぞな。」と真顔で言った。

ハイと返事し頭を下げた。暴れん坊・テンパな男と思われているのかと思つた。この言葉は私の中で一生響き続けるものになった。

今、思えば、相手の心に見事に届く言葉だった。褒めるも叱るも揺れ動く状況・心理の中にある。二 大きな失敗は叱るな

U町からバス。小田川沿いに新緑の道を進んだが人家が無い。初めて不安になった。家から布団などが届くまでどうする？
その内に道沿いに人家の並ぶ町らしい所に入り、川向こうに目を見ると、白亜の立派な建物が見えた。あれだ！思つた。

石造の頑丈な橋を渡り学校へ急いだ。校門を入るとすぐ職員室で覗くと休憩時間のようだった。すぐ並んで校長室の表札が見える。そのとき、若い女性が出てきて石丸先生ですかと問い、校長はそちら……と表札を示した。ああ、



今後はいつも先生と呼ばれるか！校長室に入つて、石丸淳です、第一日目からこのままで申し訳ありませんと深々と頭を下げた。「Mです。お座りなさい。」眼鏡の奥の顔が少し笑っている。柔和な目と温かい声だった。「いや、田舎の山奥なので来てもらえないのか、と心配しておりました。」

私は真っ赤になって俯いた。一編にM校長を尊敬し好きになつた。

今思えば、なんとという言葉であらう。微塵も私を責める心の無い言葉であり面差しであった。大きな失敗は本人が一番分かっている。真実は細部に宿る。今後、小事を大切にできるか！
三 褒め言葉は事実のみを述べる
自己紹介で深々と頭を下げる

と、「よう、来なされた。」と男の声があつて拍手が湧いた。A町と学校が好きになった。好い所に来た。

会後、Y教頭先生が宿舎案内。A町唯一のT旅館道路側二階六畳。

翌日から学級開き準備で多忙。各学年四クラスで、理想の規模やるぞ。こうして、失敗だけの教師生活が始まった。

最初の授業を済ませて職員室に帰ると、技術担当のK先生が「五十分授業したな。私は二十五分で終わって難儀した。」と私を迎えて笑つた。「そうか、激励か。」とその温かさに心打たれた。

「先生と生徒の人間関係」(サイマル出版)の中に、「褒め言葉は破壊的なり、褒め言葉は生産的なり」という言葉がある。

先生はリングをアリスに見せて尋ねた。「これは何の種類に入るかしら」アリスは答えられなくて真っ赤になつていた。先生がキャロルのほうを向くと、「果物の種類よ」とキャロルが答えた。「そうよ、いい子いい子」と、先生はキャロルを褒めた。

人格を褒めるは行き過ぎ。アリスは辛い。褒め言葉は両刃の剣。

間違えたり答えられないときの褒め言葉が、胸に届き力となる。
四 異質・異端も認める姿勢
五月の家庭訪問のとき、K先生が「行くかな。」と笑い、「お引きなさいと接待されたら、むげに断つてはいかんよ。」と言つた。

山の上の家に着くと、よう、来なされたが始まりで酒になり、結局五軒ばかりで酔い潰れ、申し訳ないと子供に伝えてもらつて山で寝た。翌日平謝りで訪問を続けた。

こんな八方破れの私が辞めずに続けられたのは、異質・異質を認める南伊予の風土の御蔭である。南予には、「がいな」という言葉がある。「がいなもんじゃ」と言つて異端・異質を認める。

この風土のあるところ、いじめはないし、真の創造が生まれる。
五 根本は人間性になる
A町に一軒だけの書店。よく出掛け雑談した。家・財産を注ぎ込んで趣味だ等と哲学を語る老主人。

宿で、夜ふと目を覚ますと子供たちが来ており、帰れと言うが、敵もさるもの引つ掻くもの、結局人生雑談になる。個性派M君の話

おい、表にガキの捨てた風船ゴムが落ちとる。拾つて来い。お前さん今夜もかい。あたぼうよ、俺たち百姓になんの喜びがあらあ！妙に大人びた顔で、この野郎ともMもがいなもんじゃと参つた。

(☎) 799-2662 松山市太山寺町 甲五一二一四

「教員人生二ヶ月目」	新居浜市・南中教諭……玉野 裕望
「十二年目の抱負」	宇和島市・城東中教諭……山口 恵利
先輩を偲ぶ……	林傳次先生遺稿集「把翠」を繙く(十四) 持ち味を生かせ
文芸……	川柳「小噴火」……仙波 弘子
	絵手紙「とりとめのないことを考えながら」……田中 勝子
	俳句「山畑半分」……三好 靖子
	短歌「把翠より」……
会員の声……	「教員人生は最高じゃったわいね」……寺尾満寿男
	「新採と指導教員の思い出」……小野植元幸
	「ロシア兵墓地」清掃奉仕活動する「木曜会」……菅田 顕
	「溝口誠一先生の死を悼む」……吉原 宏文
表紙作品「地層」について……	(18)
学部トピックス……	(22)
・まちなか大学	
・ホームカミングデー	
放送大学入学生募集……	(21)
同窓会支部長会報告……	(23)
叙勲・受賞……	(14)
原稿募集……	(26)
寄付者・会報送料送金者名	(26)
敬 申……	(26)
シンポジウム「愛媛とロシア・オレンブルグの交流」を開催しました……	(27)

学部の今

教職支援ルーム

平成二十一年四月から愛媛大学教育学部二号館一階に「教職支援ルーム」が設置されています。「教職支援ルーム」は、教師を目指す愛媛大学のすべての学生に、教職に関する情報を提供し、教師としての必要なスキルを身につけてもらうためのお手伝いをする部屋です。



三部屋ある教職支援ルームに、パソコンやプリンターなどの機器

類、また教育体験活動に使う教材作りのための文具類など用意し、活動のための事前準備や教採などのための学習ができる場となっています。そしてまた、授業作りや教材研究に役立つ教科書、指導書、指導要領などの書籍やDVD、教員採用試験に向けて過去の問題や月刊誌を置いています。

教職支援ルーム ホームページ <http://tdsr.cte.ed.u-n.ac.jp/>

教職支援ルームの役割は、主に「学生の教育体験活動の支援」と「教員採用試験に関する支援（対策講座の開設や情報提供など）」の二つです。愛媛大学教育学部では他の大学に見られない特徴的な実習（ふるさと実習など）が設けられ体系的に配置されています。一年次の観察実習、二年次のプレ教育実習とふるさと実習、三年次の教育実習、四年次の応用実習・他校種実習と、学生を段階的に、授業を受ける立場から授業をする



立場へと導いていきます。それに加えて、ここ教職支援ルームが窓口になっている「地域連携実習」は一年次からいつでも、どれにでも自分の意志で参加できる教育体験活動です（教育学部生以外も参加可能）。高校を卒業したばかり

の学生が、二年次に行くふるさと実習で、少しでも先生としての意識をもって臨んでくれるよう、一回生にはふるさと実習に行く要件として「地域連携実習」に最低六時間以上参加することを義務づけています。教員採用試験の願書ではボランティア経験を問われることが多いので、学生が愛媛大学でボランティア経験を積めたのは本当に良かった、愛媛大学を選んで良かったとよく言ってくれます。「教員採用試験に関する支援」

は、採用数の少なかった時代に始まり現在に至ります。昨年度から愛媛県の採用数は伸びています。が、学生が講師経験を持つ受験生と渡り合うのはとても大変なことです。学力試験では優位に立てても、面接や討論では経験値が少ない学生には戸惑う内容も多いでしょう。大学も現役合格者を増やしたいということで、最近では、学部の先生方もこちらを利用するよう勧めてくださっています。



●学生の教育体験活動の支援

教職支援ルームが窓口になり、主に松山市の小・中学校、教育委員会、公民館などから依頼を受けて実施する「地域連携実習」には、授業の補助やキャンプなど幅の広い、また、数多くの活動があり、学生の教育体験活動を支えています。



す。
二十八年度地域連携実習の現状
事業提供機関（協力校）
.....六十九
・全事業数百七十七
・参加者数三百六十四
・延べ参加者数六百八十八
地域の方々に支えられ、多くの提供事業をいただき、延べ六百八十八名の学生が松山市や地方のボランティア活動に参加しました。
学生は子どもとかわるごとの楽しさや難しさなどを経験し、またそれらを大学での学習と結びつけながら省察を繰り返すことで、実践的指導力を身につけています。

【地域連携実習の具体的活動例】

・学生企画型

学生が企画し、土曜日や日曜日に子どもたちを相手にして実践を試みる学生企画型の活動

・短期実習

水泳や運動会の補助、部活動の補助、放課後学習の補助、キャンプの手伝い、宿泊合宿の手伝いなど

・継続型実習

授業の補助、配慮を要する児童の支援、部活動の補助、施設でのボランティアなど

・学習アシスタント

松山市教育委員会と連携した学習アシスタント、放課後アシスタントなどの事業。



●教員採用試験に関する支援



●教員採用試験に関する支援

教職支援ルームには毎日多くの学生が訪れていますが、特に十月くらいからは教育実習を終えた教育学部の三回生が頻繁に出入りするようになっています。また四月半ばからは、教員採用試験を目前に控えた全学部の上回生が毎日ひっきりなしに訪れて、願書についての相談をしたり、教員採用試験の詳しい情報を集めたりしています。

二、三回生の時点から教員採用試験の問い合わせに来る志の高い学生も少なくありません。教採対策の雑誌、教育新聞や教育ジャーナル、日本の教育等をおいているので、現在の教育に関する情報を得ることができます。また、全国の教員採用試験過去問や卒業生が残してくれた過去のデータも非常

【面接対策】

講師の先生方をお呼びして、個人面接や集団討論・集団面接などのアドバイスをいただいています。

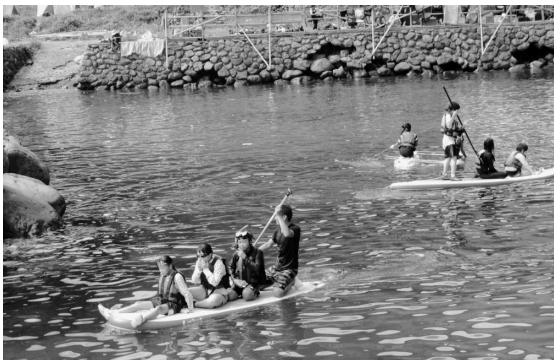
に豊富に揃っているため、有用な情報が得られます。そして、教員採用試験の受験者にとって、学部を超えて、同じ都道府県を受ける仲間や同じ校種の仲間と知り合える場にもなっています。



教職支援ルームに常駐している教育支援者木村です。

現在、ここに勤めて九年目に入りました。若い学生とのやり取りが毎日楽しく、年々若くなっているような気がします。初々しく

入ってきた新入生が卒業を迎える時に、あつという間の四年間だったね！もう卒業なの！とよく話をしますが、あつという間だけれどこの四年間は、それぞれの学生さんが人間的に大きく成長している時間となっていることを実感しています。一回生の特徴として、靴がピカピカで私服も似たり寄ったり、四、五人で行動する人たちも多く、部屋に入ってくる時も



自信なさげに緊張した面持ちですが、四回生になると、服も個性的になり、ほぼ単独行動で、部屋に入ってきて落ち着いた雰囲気がある機会が三回あるのではないかと思います。一回目は教育実習に行った後、二回目は教員採用試験

に向けて頑張った後、そして卒業論文で苦しんだ後です。社会人として巣立っていく学生の姿は頼もしいかぎりです。そうした学生と、時には厳しく、時には冗談を言いながら、たまに深い話を聞いて楽しく付き合っています。また、卒業生が大学に来た時に、ついでに顔を見せに来てくれますが、先生になつてからの苦悩や体験談を話してくれるその時が一番嬉しいです。最近、「育休に入ったので連れてきました。」と赤ちゃん連れで来てくれたのは感激でした。これからも学生と仲良く、ふらつと寄れる居場所づくりを目指し、できるだけ健康に過ごしていきたいと思っています。



学内最近のニュース

松山市「3年教職経験者研修」で教職大学院・院生が講師を務めました
【1月24日(火)】

平成29年1月24日(火)、松山市教育研修センターで開催された「3年教職経験者研修」で、本学教育学研究科教職大学院・院生が研修会の講師を務めました。

この研修は、松山市教育委員会が独自に取り組む「若手教員育成研修」という位置づけで、3年間の教職経験を積んだ教諭を対象として年間を通じて行われるものです。今回はその第5回目であり、院生は、午前中に行われた「学校組織マネジメント基礎講座」を担当しました。

研修会の講師を務めたのは、教職大学院リーダーシップ開発コースに所属する5人の院生です。院生は、教職大学院で自らが専攻するテーマや最新の知見を提供することを目的として、「目標管理」、「コンプライアンス」、「学校地域連携」、「ワークライフバランス」の4つのテーマを設定し、研修を担当しました。

研修では、教職大学院での学びを積極的に現場に還元しようとする工夫が随所に見られ、カリキュラムで訪れた実習先の様子をVTRで紹介する場面もありました。また、どのテーマの研修においても、講義に加え、ワークシートを活用した個人ワークやグループワーク、全体での討議が採り入れられており、研修方法にも様々な工夫がなされました。

研修終了後、代表者から「日頃の教育活動を省察する良い契機となり、ワークショップ形式で行われた研修によって、参加した教諭同士のネットワークを深めることもできた」との感謝が述べられました。



教育学部留学生歓迎会を開催しました【4月24日(月)】

平成29年4月24日(月)、教育学部本館2階会議室で、教育学部留学生歓迎会（前学期）を開催しました。教育学部では、今年度4月から新たに5人の留学生を迎え、現在9人の留学生が在籍しています。歓迎会には、留学生、教育学部長、指導教員、国際交流委員会委員、留学生チュータ、事務職員などが一同に集いました。

国際交流委員会委員長の立入哉教授の司会のもと、佐野栄教育学部長の歓迎挨拶があり、乾杯でパーティが始まりました。その後、留学生が紹介され、それぞれ日本語で自己紹介を行いました。歓談を通して交流が行われ、和やかな雰囲気の中で閉会となりました。留学生の皆さんにとって、本学で過ごす留学生生活が有意義なものになるよう願っています。



佐野栄教育学部長の歓迎挨拶



留学生の皆さん

愛媛県教育委員会との連携講座を開催しました【5月9日(火)】

平成29年5月9日(火)、本学教育学研究科教職大学院にて開講中の講義科目「愛媛の教育改革」において、愛媛県教育委員会義務教育課より、小澤和樹管理主事主幹、山内孔指導主事主幹をお招きし、お話を伺いました。

小澤管理主事主幹からは、教職員の服務について、愛媛県全体の基礎データや法律の条文を参照しながら、教員の使命や服務規律の確保、求められる教師像についてお話を伺いました。

山内指導主事主幹からは、学力とは何か、教育における不易と流行とは何かということを中心に、学ぶことの意欲や教えることの技術について、具体的な場面や問題を通してお話を伺いました。

受講する教職大学院生からも積極的な質疑が行われ、愛媛の教育改革について考える良い契機となりました。



小澤和樹氏（愛媛県教育委員会）



演習の様子



山内孔氏（愛媛県教育委員会）



院生の様子

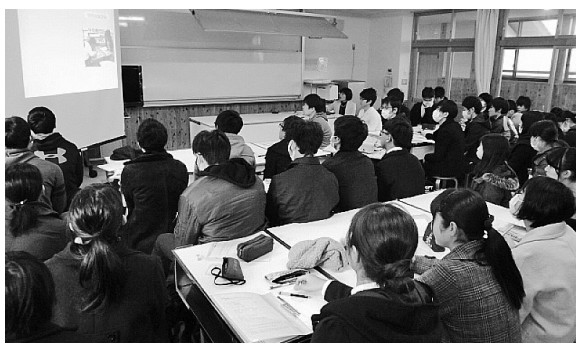
教育学部学生が伊予市立下灘小学校を訪問しました【1月13日(金)】

平成29年1月13日(金)、教育学部の学生約40人が伊予市立下灘小学校（安田智美校長）を訪問し、授業参観や児童との交流をしました。

今回の訪問は、平成28年度愛媛大学教育改革促進事業「愛媛で教員になるモチベーションを高める教育内容・方法の充実」による取組みの一つで、愛媛県内に少なくない小規模校で実際に学び、児童とふれあう中で、学生が教職の尊さや重要性をさらに理解し、愛媛県の優れた教員になりたいというモチベーションをさらに高めることを目的に実施しました。教育学部では、これまでも県内各地の小学校を訪問し、理論と実践の往還を柱とした教員養成プログラムによる成果を上げてきました。今回訪問した下灘小学校では、とても温かく学生を迎えていただきました。

交流後、学生から、「大規模校とは違って、業間の時間には全校で遊ぶことができるなど小規模校ならではのいいところを知ることができた。」「地域の人たちに愛されている学校だと感じました。地域の方々と学校とのつながりがあるからこそ、学校が存在するのだと感じました。」「小規模校では、教師も一人に時間をかけて関わることができるため、自分が教師になるうえで大切にしていきたいところの勉強がしっかりとできた。」「小規模校で働きたいとも思ったし、教師になりたいと改めて思った。」などの感想がありました。

なお、この訪問は1月14日の愛媛新聞朝刊、下灘小学校のホームページで紹介されました。来年度もこのような取り組みを実施する予定です。教育学部では、質の高い教員を輩出することにより、愛媛県内の地域の核となる人材育成にも寄与してまいります。



安田智美校長の学校経営説明を聴講



授業の中で楽器の指導を体験

職場だより



これまでを振り返って



今治市 富田小教諭 松本 一真 (平二二卒)

大学を卒業して今年が八年目となる。本当にあつという間で、達成感や充実感を味わったこともあれば、苦い経験もたくさんしてきた。

最初の五年間は中学校で講師をさせてもらっていた。学級担任ではなかったのですが、とにかく部活動に情熱を注いだ。一生懸命、生徒たちと向き合おうとした。しかし、自分の気持ちだけが空回りし、上手いかなんかことだらけであった。今思うと、生徒の思いを大切にせず、マイナスイメージをたくさん投げかけ、自分の感情だけで生きていたことが多々あり、とても反省している。そんな中で救われたのは、先輩の先生方の励ましという言葉である。困ったときは、職員室や携帯電話、飲み会など様々な場で相談し教えを乞うた。そこで「また頑張ろう。」「次はこうしてみよ

う。」と自分の気持ちを繋ぐことができた。正直、あの時に先輩の先生方に助けてもらえてなかったら、教員の夢はあきらめていたと思う。

そして、念願の教員採用試験合格。講師時代に経験できなかった学級担任を受け持つことはそれだけで誇らしく思った。一年目は三年生。中学校での経験で少しの自信はあった。しかし、当たり前であるが、ここでも指導の難しさを痛感した。一学期。最初は子どもたちの行動が可愛らしいと思っていたが、だんだんと教室の子どもの声が大きくなる。それと合わせて自分の声も大きくなる。ゴールデンウィーク明けになると、声が枯れることが度々あった。最初が肝心の三日間や一カ月ルール決めをしっかりと行なってきたことが原因であった。授業も行き当たりばつたりで、耳を澄ませて、隣のクラスの先生がどのように授業をしているか聞いてみたり、板書を写真で撮らせてもらったりすることもあった。とにかく必死であった。先輩の先生のクラスの様子を見てみると、自分の指導力のなさに打ちひしがれる毎日であった。二学期。このまま

ではいけないと思ひ、自分は何で子どもたちと向き合うか考えるようになった。休み時間。とにかく遊び、話をたくさんした。日記を見る回数も増えた。そうしていくうちに、子どもたちとの距離感が縮まってきたように感じた。多少であるが少しクラスも落ち着いてきたように思えた。三学期、決定的に先輩の先生と自分の違いに気づき始めた。それは、先輩の先生はとにかく褒めるのが上手いのだ。小学校にきて、一番中学校との違いを感じたことであった。自分それぞれに做って褒めるのだが、なかなか子どもたちの心に響かない。子どもたちが自分の褒めてほしい所と言うタイミングをまだまだ分かっていないからだと思ひは考えた。そして、一年間子どもたちに何ができたのかと思ひ、すごく申し訳ない気持ちでいっぱいになった。修了式の日にある子どもが「先生、一年間楽しかったです。ありがとうございます。」と言ってくれた言葉が自分の心の支えとなった。

二年目は五年生。年齢も上がり、三年生の時より上手いと思う。と思つた。またしても甘かった。ルール決めも、自分の中ではできていたつもりが子どもたちの中になかなか浸透しなかった。というより、徹底できていなかった。子どもたちにさせることは、責任をもつてやり切らせることの大切さ

が分かった。結局中途半端になってしまふことが多くなつてしまった。授業も三年生の時より教科が増えた。特に家庭科の裁縫や調理実習は自分の苦手分野であった。放課後、一人家庭科室で裁縫道具を広げ、練習したこともあった。それでも、自分がするのと教えるのとは違つた。子どものナツプサクにあり得ない場所にミシン糸の跡があつたりしたので。後から先輩の先生に直してもらい、何とか乗り切ることができた。五年生では年間を通して、米作り活動を行つている。また、集団宿泊研修で自然の家に行くなど、活動が広がりが子どもたちと楽しい思い出を作ることができた。しかし、自分がこんなクラスになつてほしいというクラスになかなか近づかないことが現状であった。原因はた



くさんあるが、一番は昨年度でも課題であった子ども一人一人のよい所を見付け、褒めて伸ばすことである。言うことは簡単であるが、実際にやろうとすると本当に難しい。よい所を見つければ、日頃から子どもの動きをよく見ておかないとできない。また一人一人の成長の度合いも違うので、褒めるタイミングを見逃すともう遅いのである。それでも、とにかく褒めることを意識して一年間取り組んだ。そうすると、ある保護者から、「子どもが家に帰ると、先生から褒めてもらつて喜んでた。」という言葉ももらった。継続して取り組んでよかったなと思つた瞬間であった。

今年で三年目。クラス替えはあつたが、持ち上がりで六年生を持たせてもらえることになった。これまでに先輩の先生方や子どもたちから学んできたこと、「一生懸命、誠実に接すれば子どもや保護者は理解してくれること」「褒めることが子どもの成長に一番繋がること」「すぐに止めず、継続して取り組むこと」を大切にしていきたい。そして、子どもたちにとって小学校最後の一年間がかけがえのない思い出となるように、努力していきたい。

799-1511

今治市上徳

甲三九四一四

私の強み



松山市
清水小教諭
森元愛咲子
(平二七卒)

小学校の先生を目指すように

なったのは、小学四年生の頃でした。その時の担任の先生は、新任一年目の先生でした。私たちが子どもに寄り添って話を聞いてくれて、毎日楽しく授業を受けたり、休み時間には遊んだりしてくれました。四年生最後のお別れ会では、先生のためにサプライズを企画し、学級を離れることを惜しまれました。先生も涙ぐみながら「ありがとう」と話をしてくれたのを今でも覚えています。一緒に笑って、泣いて過ごした一年間が忘れられず、いつか私もこんな先生になりたいと強く思うようになりました。

教員になるまでの道は、思っていたよりも大変で思うようにはいきませんでした。大学の同級生の中で、教員採用試験を受ける仲間を集めて、勉強会を開きました。

教員採用試験の過去問を分析してテストを作ったり、面接の練習をしたり、夜遅くまで大学に残って勉強しました。試験当日は、先輩や友達が作ってくれたお守りやお菓子を持って挑みました。離れて暮らす両親からのメールにも力をもらいました。

しかし、第一志望であった地元教員採用試験の一次試験は不合格。一方愛媛県は一次試験突破。これも何かのご縁だと気持ちを切り替えて二次試験に臨みました。今でも思い出されるのは、二次試験の結果発表の日が、教育実習最終日だったことです。指導教員の先生と職員室で一緒に私の受験番号を探しました。自分の番号を見つけた瞬間は、涙が止まりませんでした。実習中であつたため、たくさんの先生や子ども達からお祝いの言葉をいただきました。そして、こっそり両親にも報告をする、喜んでくれました。

大学では、教員採用試験を共に乗り越えた仲間との出会い、こんな先生になりたいと憧れる先輩教員との出会い、教師の卵である私にも「先生！先生！」と慕って

れた子ども達との出会い。数え切れないほどの人との出会いに支えられ、教員採用試験を乗り越えることができました。

しかし、本当の教師の大変さを実感するのは、ここからでした。大学卒業後すぐに学校現場に出た私は、講師経験もなく、初めてのことがばかりでした。初日は、「職朝」って何だろうという疑問から始まり、分からない言葉ばかり聞く職員会議は苦痛そのものでした。周りの先生方が快く手を差しのべてくださる度に、自分の仕事の出来なさや、周りの先生方に追いつけない不甲斐なさに、不安な気持ち募るばかりでした。周りの先生方への申し訳なさや、これからの仕事に対する不安に押しつぶされそうになり、泣きながら帰宅することが何度もありました。

忙しい中でも、そんな私を優しく導いてくれた学年主任の先生、授業準備や生徒指導のお手伝いをしてくださった学年部の先生。何も分からない私に「から指導してください」と言われた先生、初任者研修では毎度初めて学ぶことがかりでした。校内研修では、様々

な研修を組んでくださって、多くの先生方の力をお借りしました。学生時代の私の強みであった「人との出会い」が、清水小学校で働くことになった今でも、私を一回りも二回りも成長させてくれる出会いになったのです。毎日毎日新しいことばかり起きて、自分のできないことすら分からない、先を見通せず何をしたらよいのかも分からない、苦しみながらも目の前の素直で目をきらきらと輝かせる子ども達のために、自分でできることを精一杯取り組んできました。初めて担任した四年三組二十七名の子ども達のことは一瞬忘れません。今でも校内で会うと、一言、二言声を掛けずにはいられません。

今年度は、一年生を担任させていただくことになりました。昨年度とは教室の世界ががらりと変わりました。一年生にとって、何もかもが初めてのことはかりで、何だか去年の自分と重なるような気がします。初めての集団登校、ランドセルの片付け、給食……。始めの頃は、授業中に私が黒板に文字を書くことですら新鮮だったよ

うで、興味津々に見つめていました。そんな期待と不安でいっぱいの子ども達が学校生活に一日でも早く慣れることができるよう、子ども達との関わりを大切にしています。

教師を始めたばかりは、苦勞ばかりで大変なことしかないと思っていた仕事ですが、今では、毎日教師になって良かったと思える瞬間に出合えます。最近では、去年受け持っていた子ども達も、一年生のお手伝いをしてくれたり、一緒に遊んでくれたりすることです。子ども達の成長を近くで感じられることが、とても幸せです。

私の強みである「人との出会い」を大切に、これからも多くの人と関わっていきます。さらに、子ども達にも「人との出会い」を大切にしてほしいという願いを込めて、出会いを繋げられるような教師になりたいと思っています。これからも強みを生かして、周りの先生方や子ども達に恩返しができるように、精一杯教師生活を全うします。

人生の「あいうえお」



伊予市 郡中小教諭
玉川 治佳
(平二三卒)



数少ない私の自慢は、四月に少しだけ運が良いことだ。どの学校でも、人との出会いが良い気がする。関わってくれている先生方は本当に優しく、多くの経験を惜しみなく教えてくれる。教えてきた生徒達も全員大切だ。やんちゃで大変な生徒もいたが、もし関わることがなかったら、と考えると寂しくなる。

今年度、初めて小学校に勤務するチャンスを送っていただいた。「備えあれば憂いなし」という言葉があるが、免状を多くもっておくとたくさんの経験ができると、とてもうれしく思っている。

小学校は教育実習に行った程度だ。異動を命じられたときは本当にどうしていいのかわからなかった。授業の準備も背面掲示のストックも、ゼロから始めなければならぬ。不安ばかりが大きくな

なった。

四月になり、郡中小学校の先生方との出会いがあった。学年部の先生方はじめ、本当に周りの先生方が良くしてくださる。そのおかげで、心機一転、また始めればいいのか、と前向きになることができた。お世話になった先生方についてお礼ができたなら、と思うが、なかなか難しい。周りの先生方の動きをよく見て、次にすべきことをよく考えていきたい。

小学校の生活は、中学校と全く、というほどではないが、やはり違っている。一つの教科だけを教えるというわけではない。空きコマもほとんどない。あつたとしても、宿題チェックなどで終わってしまふ。毎日が「忙しい」と思う暇もないほど忙しい。一日中、子どもたちと一緒にいる。部活動はなく、相撲部、バトン部、飼育当番などの活動がある。代わりに、土日は自分のタイミングで仕事をすることうができる。

小学生はなんでも反応が素直で初々しい。私が「ぐでたま」というキャラクターの小物をもっていったら、その絵をどんどん描いてもってきてくれる。私もうれしくなつてどんどん色画用紙に貼つて

背面掲示板に掲示している。朝の会や終わりの会で紹介すると、他の子たちもどんどん描いてくれる。もう掲示する場所がないのが、今の一番の心配事だ。

学級の子どもが、私の掃除担当場所を聞いてきた。四年一組の自分の教室だ、と答えると「やったー」と喜んだり、「なんで先生が俺の掃除場所じゃないんよー」と悔しがったりしている。バトン部で教えるのは私だと学級の子に伝えると、「じゃあやってみようかな」「面白そう」という反応がある。

ある先生と話をさせていただいているうちに「あいうえお」はなぜこの順番か、という話になった。人生の中で大切な順に並んでいるという。

あ 愛
い 命
う 運命
え 縁
お 恩

だそうだ。なるほど！と思い、子どもたちにも話してみた。「あいうえお、は、実は意味のある順番です。人生の中で大切な順に並んでいます。どんな言葉かな？」

子どもたちは自由な発想で口々に発表した。

に発表した。

あ 愛
い 命
う 運
え えんびつ
お 思いやり

本当にかわいらしい。しかし、かわいらしさを実感するたびに、怖さも感じる。「学級王国」という言葉がある。私だけが評価をする。専科の先生が見てくれるのは二教科しかない。私の好き嫌いにまつてしまわないように、客観的に評価ができるように気をつけたい。

今年度、私の数少ない長所が増えた。中学校での教員経験があるということだ。胸をはって言うには不安がある。それでも、「人生のあいうえお」を大切に、目の前の子どもたち全員が充実した学校生活を送れるように努力を続けたい。

「お」の次は「か」だ。意外と忘れがちな「感謝」の気持ちをも自分にも、子どもたちの中にも育てていきたい。

☎ 799-3112 伊予市上吾川二一〇



背面掲示の様子



初心忘るべからず



松山市 附属小教諭 今永 晴香 (平二三卒)

先日、縁あって、大学時代にしていた『わくわくチャレンジサターデー(通称・わくチャレ)』という学生の活動に行かせていただいた。土曜日に小学校の教室をお借りして、子どもたちに来てもらい、大学生と一緒に勉強したり、遊んだりする活動である。仲間とともに熱く語り合い、子どもたちと向き合おうとしていたわくチャレの活動がとても懐かしく、教師を目指す者としていた頃の自分を思い出した。

良さや楽しさを感じながら生活できるように、教師は常に子どもたちのために思って行動することが大切である』ということ。三つ目は『子どもたち一人ひとりの一瞬一瞬を大切に、指導に生かしていくことが大切である』ということである。教師になるために、機会を逃さず、様々なことに挑戦し、理想の教師像や教育観を描いていた。教師になるという夢が叶ったときは本当に嬉しくて、四月からがとても楽しみでたまらなかったのを今でも覚えている。教師生活初めてのクラスは三年生三十七人。とても個性豊かな子どもたち。とてもかわいい子どもたち。しかし、集団を一人で動かすことの難しさを痛感した。毎日怒濤のように過ぎていく速さに驚いた。

てくれる周りのたくさんの人たちからのアドバイスやエールに感謝しながら、色々なことに前向きに挑んでいる自分がいた。悩む日々は続いたが、心の支えになっていたのは子どもの無邪気な笑顔だった。どんなに辛くても、子どもの笑顔を見れば、それが活力となった。どんなに失敗が多くても、少しでもうまくいったなど感じる気持ちを大切にするようにした。思い描く理想の教師像にはまだまだ程遠かった自分ではあるが、教育に携わることが自分のしたいことであることは間違いなかった。

お世話になった学校で今度は私が実習生の指導する立場にならなくてはならないと分かったときにはぞつとしたが、大学生の頃にお世話になった大学の先生方や、同僚の先生方に助けていただきながらなんとか一年目を乗り越えることができた。ただ、得たものはとても大きかった。『教師は常に、子どもたち一人一人のことを大切にする姿勢が必要である』、『子どもたちが居心地の良さや楽しさを感じながら生活できるように、教師は常に子どもたちのために思って行動することが大切である』、『子どもたち一人ひとりの一瞬一瞬を大切に、指導に生かしていくことが大切である』という、学生の頃に描いていたことを、改めて考えるきっかけとなった一年間だった。実習生と関わったり、授業研究を繰り返したりする中で、子どもたちのために、何ができるのか、初心に返り、勉強させていきたい。

しかし、これは初めて知ったことではなく、わくチャレの活動をしていたときにも授業づくりの際に大切にしていたことであった。大学時代に学んだことが少しずつではあるが、開花し始めているのを実感している。

振り返ると、今まで出会ってきたたくさんの人たちのおかげで今の自分があるということをつくづく感じる。そして、いろいろな人とのつながりが、私の教員生活を、さらには人生をより豊かにしてくれている。貴重な経験をさせていただけにいることに感謝し、これからも子どもたちとともに挑戦し続け、自分の可能性を広げていきたい。

790-0855 松山市持田町一丁目 五二二



コンピュータと じゃんけんぽん



四国中央市
三島南中教諭
大西 智晴
(昭五七卒)

二度目の勤務を命じられた三島南中学校は、四国中央市にある全校生徒数が約二百人の規模の小さい中学校です。赴任した時にびっくりしたのは、職員室や普通教室のあった北校舎が新しくなっていたことでした。元あった場所から校舎の厚み分だけ北に移動した場所、旧校舎の前にあった道と運動場に降りる斜面の上に新校舎は建てられていました。

新しい建物は気持ちの良いものです。板張り廊下を歩き、同様に板張りの階段を新校舎の三階まで上がると、北面の廊下側の窓からは、穏やかに広がる燦灘が見えます。校区の四国中央市寒川町と豊岡町は、平野が狭く海と山が近いところ。校舎の南には、法皇山脈のすそ野がすぐそこまで迫ってきています。学校の周りには田畑が広がり、校区内に商店街や大きな商業施設はありません。そんな環境の中、地域の人々の目も届きやすいためか、純朴で、素直な生徒が育ちます。

私は、そんな三島南中学校で全クラスの「美術」と「技術・家庭」の技術分野の授業を担当しています。新校舎は美しいのですが、美術室や技術室、パソコン室は、中庭を挟んで建つ古い南校舎にあります。私はそこで生徒たちが来るのを待っているわけです。今、三年生の技術の授業は、パソコン室で、「プログラムとプログラム言語」の学習をしています。

私がパソコンと出会ったのは、三十五年くらい前、大学に入ったばかりの頃。ゲーム機が登場するのはもっと後で、喫茶店でインベーダーゲームを楽しんでいた時代です。家庭用のコンピュータはまだ普及していません。研究室にキーボードとディスプレイがあって、マニュアルを渡されました。「パソコン」は「パーソナルコンピュータ」の略ですが、当時は「マ



イクロコンピュータを縮めて「マイコン」と呼んでいました。マイコンという言葉は、今は少し違う意味で使われています。

分厚いキーボードの中に本体が内蔵されていて、ディスプレイは黒い画面に緑のドットで半角文字しか表示されないグリーンディスプレイ。データの記憶はカセットテープ。間違えてファックスの番号に電話したときに聞こえる「ガー、ビー」の音。そんな「ガー、ビー」を何分もかけて録音していました。ハードディスクやUSBメモリーが登場するのは、もっとずっと後の話。

マイコンは、BASIC(ベシック)というプログラム言語を使って、プログラムを記述して働かせました。当時の文法とは少し違うのですが、VISUAL BASIC(ビジュアルベシック)という言語が、現在の「ワード」や「エクセル」に標準装備されています。これを使って「コンピュータとじゃんけんをしよう。」というわけです。

自分の出す手を考える。↓相手も手を考える。↓「じゃんけんぽん」↓これを合図に二人とも手を出す。↓二人の手を見て勝敗を決める。

人とじゃんけんするのならこんな感じですが、コンピュータの前に座って、いくら大きな声で「じゃ

んけんぽん」と叫んでも、コンピュータは手を出しません。「じゃんけんぽん」の合図の伝え方はいろいろ考えられるのですが、授業ではこうしました。こちらが先に手を決めて、ボタンを押します。これを合図にコンピュータが手を決めます。これには、乱数の機能を使います。コンピュータが〇〜一までの数の中から一つだけ選ぶという機能です。この数字が〇・三三より小さいと「チョキ」。

それ以外は「パー」にします。これで三分の一の確率でコンピュータの手が決まります。こちらにわかるように表示させれば、これでじゃんけんはできます。でも勝敗の判断は？

勝敗の判断をコンピュータにさせるには、こちらの手をコンピュータに知らせる必要があります。これにもいろんな方法がありますが、ボタンを三つに増やして、「ガー」「チョキ」「パー」それぞれのボタンにします。どれかのボタンが押されたら「じゃんけんぽん」の合図。押されたボタンによってコンピュータがこちらの手を知ることができます。「ガー」のボタンが押されて、コンピュータが「ガー」なら「あいこ」。コンピュータが「チョキ」なら「勝ち」。コンピュータが「パー」なら「負け」を表示



させます。

「チョキ」のボタンが押された時の処理は、「ガー」のボタンが押された時のプログラムの「ガー」「チョキ」「パー」または「あいこ」「勝ち」「負け」を入れかえればできあがり。「パー」のボタンの処理も、プログラムをコピーして、少し修正すればできあがり。さあ、じゃんけんしてみよう。

プログラム言語は、単語や文法が違っていたらエラーになります。アルファベットが一字でも違っていたらじゃんけんが止まります。子どもたちは画面とにらめっこ。もうチャイムがなりそうです。楽しみながら考える、ゴールに向けて試行錯誤する姿。生徒と共に楽しんでいる私です。

教員人生二ヶ月目



新居浜市
南中教諭
玉野 裕望
(平二九卒)

私は今年の三月に愛媛大学の教育学部を卒業し、四月の桜が満開の頃に辞令をいただいて教員生活一年目をスタートしました。今、これまでの学生としての生活とは全く異なる時間の流れを感じています。

私は大学時代に積極的に実習に参加をしていました。三回生の本実習以外には、二回生のふるさと実習、四回生の応用実習、通年で子どもと関わる地域連携実習に参加しました。様々な実習を経験したことで、余裕をもって現場に出られると思っていました。しかし、実際の教育現場と実習とは責任の重さや、するべきことの多さなど全く違いました。日々に圧倒されながらも、自分と生徒の成長のために前向きに一月間奮闘しました。まだ一か月しか経ってはいませんが、多くの失敗と学びを得

ました。

まず、生徒指導面では生徒に対して厳しく叱り過ぎていました。「教師は生徒のためにいけない」とはきちんと叱らなければならぬ」という思いが強く、必要以上に叱っていました。しかし、先輩の先生方を観察すると、できていない生徒を褒めることでできていない生徒の行動を促していました。また、厳しく叱った後こそしっかりと見守り、生徒が以前に失敗したことができるようになった時にたくさん褒めていました。先輩の先生方の様子から、生徒指導について、「生徒を伸ばす」という目的をもち、褒めることや叱ることの使い分けを場に応じて行わなければならぬ」と学びました。最近では、

「もう叱られたくないなあ」と先輩の先生にきつく叱られた男の子生徒が言った言葉が印象に残っています。生徒は誰しも叱られたいのではない、褒められたいと願っていることに改めて気が付きました。私は、これから生徒の良い点や成長しているところを積極的に見つけ、褒めることもしっかりと行い、「生徒を伸ばす」指導を

してまいります。

次に、授業では時間配分が分からず、授業の流れを先まで作っておき、進められるところまで進めるという進め方をしていました。しかし、その方法では、一時間の目標が定まらず、だんだらとした授業になってしまっていました。特に、授業の目標の確認を生徒とできないことは問題であると思いい、一時間にやることを決めて、目標を生徒と確認するようにしています。目標が定まることで、生徒も何を学んだかがはっきり分かるようになります。授業の最後にはいつも生徒に「自己評価カード」を記入させますが、授業の目標を踏まえて、自分にどのような力が付いたのかを書ける子が増えていきます。これからは目標をしっかり生徒と共有し、目標が達成できるような手立てを講じていきたいです。

授業についてのもう一つの課題に、指導案を練るのに時間がかかってしまうということがあります。教材研究に没頭してしまい、睡眠時間が三時間をきるといったこともよくあります。睡眠時間が短いと日中に疲れが出てしまい、

改めて睡眠の大切さを実感しました。時間に余裕をもつことはまだまだ難しく、いかに効率を上げるかが今後の課題だと感じています。

最後に、部活動指導について、私はソフトテニス部の副顧問を担当しています。私はソフトテニスを習ったことがなく、さらに今まで部活動を経験したことがなかったため、部活指導に不安を感じていました。副顧問という立場に甘えて逃げていましたが、先輩の先生方に

「毎日顔を出すことが大切」と教えていただいたりからは、よく顔を出し、一年生と一緒に素振りをしていきます。毎日顔を出すと、生徒との信頼関係が日ごとに深まってくことを感じました。以前は、授業でも挙手をしなかった生徒が、部活を通して信頼関係ができることにより、授業でも積極的に挙手をするようになりました。部活指導は、教科指導と両輪なのだと感じました。

このように、失敗して悔しい思いをすることも多いですが、生徒が成長している姿や一生懸命に頑張る姿、楽しそうな様子を見ると

どんな苦労も吹き飛ばす気持ちになります。さらに、信頼関係が少しずつできてきている今、「生徒がいるから頑張れる。」こう思うことが多くなりました。

私は「人は人の中で幸せになれる」といつも信じています。人は、様々な人に出会って、学び合いい、笑い合い、時間を共に過ごすことによって幸せになれると考えます。生徒にも、多くの人と出会います。幸せになってほしいと願っています。そのためにも、人と優しく繋がる力を学校で身に付けさせたいと思います。

792-0811

新居浜市庄内町二丁目
九一三三二〇六号



十二年目の抱負



宇和島市
城東中教諭
山口 恵利
(平一八卒)

私の教員生活も、早いもので十二年目を迎えました。大学を卒業後、母校である城東中学校に赴任し、何も分らないまま無我夢中で教壇に立っていた頃が、今では懐かしく感じます。当時は、初任者研修で先輩方のお話を聞く度に、「先輩方のようにならなくては」と必死で、仕事を楽しむ余裕は全くありませんでした。しかし、約十年という経験の中で、任せられた仕事にやりがいを感じられるようになり、目標をもって仕事に取り組むことができるようになりました。

今私が一番興味のあることは、特別支援教育です。通常の学級に所属しながら特別な支援を必要とする生徒の気持ちに寄り添い、適切な支援を行うことができる教師でありたいと考えています。このように考えるようになったのは、

Yという女子生徒との出会いがきっかけでした。

当時中学一年生のYさんはとても明るく真面目な生徒で、授業中は進んで拳手をを行い、宿題を忘れたことは一度もありませんでした。しかし、彼女は英語が得意ではなく、毎回行う単語テストでは、ほとんど正解することはできませんでした。「あれだけ努力しているのに、なぜだろう。」と疑問に思いながらも、私にできることは、ただ「頑張れ」と励ますことだけでした。

このような状況が一月ほど続いたある日、「このままでは英語が嫌いになりそう。」という言葉聞き、彼女の学級担任に相談しました。偶然にも彼女の学級担任は特別支援教育コーディネーターをしており、夏休み中に彼女と面談を行い、得手不得手を調べてくれることになりました。その結果、目より耳からの情報を処理する方が得意であること、これまでの勉強方法では成果が期待できないことが分かりました。そこで、二期からは英語の勉強方法、特に単語の覚え方を大きく変えることにしました。まず、単語をノートに

書いて覚えるのを止め、CDを聞きながら音で覚えるようにしました。「table」という語を覚えるためにt・a・b・l・eとつづりを何度も唱えます。また、教科書に載っている英文全てにカタカナで読み仮名を書いて渡すと、彼女は予習として音読をするようになりました。アドバイスを参考にしながら勉強法を変えることで、英語に対する意欲も高まってきたようでした。

と喜ぶYさんの笑顔が、今でも印象に残っています。

彼女との出会いは、英語が苦手な生徒への支援を考えるきっかけとなりました。目の前にいる生徒全員に同じ指導を行うのではなく、個に応じて指導することの重要性を実感しました。もちろん、教師一年目から抱えている「生徒に英語の面白さを伝えたい」という気持ちは、今も変わっていません。ただ、英語が苦手な生徒の気持ちに寄り添い、諦めずに努力することの大切さを教え、達成感を味わわせたいという思いが強くなりました。

このように、特別支援教育について勉強したいと思っていた私に、数年前素敵な出会いがありました。地域で活躍されている特別支援教育の専門家と、特別な支援が必要な子どもをもつ保護者が参加する勉強会を紹介していただいたのです。ここでは、特別支援教育の現状を学ぶだけでなく、保護者の思いや願いを直接聞くことができます。また、ミュージックケアや身体ほぐし運動等、子どもが喜ぶレクリエーションを体験することもできます。今後も積極的に

勉強会に参加し、特別支援教育に関する知識を身に付けていきたいと思っています。

まだまだ未熟な私ですが、生徒との関わりを楽しみながら、笑顔で仕事に打ち込むことができていると思います。いつも支えてくださっている周りの人への感謝の気持ちを忘れず、常に謙虚でありたいと思います。そして、今からの十年の間に、「これだけは誰にも負けない」と自慢できるものを見付け、誰からも頼りにされるような教師になりたいです。

特別支援教育について勉強し始めて数年たった頃、ある保護者からうれしい言葉を掛けていただきました。

「担任の先生に特別支援教育の知識があると安心します。今まで誤解されてばかりだった我が子の特性を理解してもらって、一緒に支援の方法を探してもらったことをずっと願っていました。」

学んだ分だけ幸せや感動が待っていると信じて、今後も努力していきたいと思っています。

☎ 798-0080

宇和島市新田町

三丁目三一(一)





先輩を偲ぶ

林傳次先生遺稿集

「把翠」を繙く(十四)

持ち味を生かせ

大正五年一月、教生として附属

小学校の五六学年の複式学級に配

属されたわたしは、そこで直接芦

田先生の御指導をうけることに

なつたが、これはわたしにとって

大きな仕合せであつた。

始めての授業をすましたあと、

御批評をお願いすると、「まあ

四五時間やつてごらんさい。そ

のあとでいうことがあれば言いま

しょう」とのこと、五六時間やつ

たので改めてうかがうと、「あな

たの持ち味を生かすようにおやん

なさい、持ち味をね。」とたった

それだけであつた。

先生が国語教授に堪能な方であ

ることはよく耳にしていたし、ま

たその頃佐々醒雪博士主幹の文章

講義録で、先生の読み方教授、綴

り方教授などを読んでいたので、

いろいろと細かい注意や懇切な指

導をしていただけるものと期待し

ていただけに、この簡単なお言葉

はやや不満でもあり、いささか拍

子ぬけの感がしないでもなかつ

た。だが静かに考えて見ると、「持

ち味を生かす」ということは、そ

んな簡単なことでも容易なこと

もなかつた。

一ヶ月あまりで中学校の方の教

生に移つたのであつたが、その頃

には、この言葉をわたくしなりに

持ち味を生かすということは持ち

味そのままを肯定することではな

く、持ち味を高め、深め、磨きを

かけることであり、人真似や付焼

刃に墮することなくしつかりと自

主的に考え、自主的に行動しなけ

ればならないと訓えてくださった

ものだと解釈し理解していたよう

に思う。毎日短い時間ではあつた

が先生から何う雑談などからだん

だん眼が開かれて、漸くここまで

会得できたのである。その頃先生

は岡田式静坐法に傾倒しておられ

たし、また忽滑谷快天師について

禅をも修めておられたので、さり

げない雑談中の片言隻句にも、時

に鋭い機鋒を蔵しておられたし、

ぐらつと足元をすくわれるような

思いをさせられたことも少なくな

かつたのである。

先生が長い間の公職からすつか

り退かれて教壇行脚が始められた

のは、大正の終りか昭和の始め頃

であつたかと思う。大正十四年の

初夏の頃久し振りで上京した機会

に、大塚仲町のお宅に伺つたとき、

そういうお考えを漏らされたのを

覚えてゐる。愛媛県にもしばしば

廻つてきて下さつたが、その頃は

県庁に勤めていて何かと多忙で

あつたため、お伴をする機会もそ

う多くはなかつた。しかし教壇上

に立たれた先生を時たま拝見する

毎に、いつも何か新しいものが付

け加わつてゐるのに驚嘆し、そし

て「どこそこで、こういう事があつ

たので」「……にヒントを得て」

と説明されるのを伺つてあらゆる

経験を国語指導に生かしていらつ

しやる態度に、頭の下る思いをし

たのであつた。しかし先生の国語

指導の根幹は十数年前、東京高師

の附属小学校の複式学級時代のも

のであり、それがいろいろの地域

で、いろいろな能力のこどもを指

導された経験によつて、深められ

磨きがかかつたものであつて、つ

まり先生は先生の持ち味を一生か

かつて生かして行かれたのであ

る。すべての力を傾けて一すじの

道を歩き続けた人の強さ尊さ、そ

れを身に示して下さつたのが、わ

が芦田先生であつた。

――「回想の芦田恵之助」より――

祝・叙勲

(平成二十九年四月二十九日)

☆瑞宝小綬章

教育功労賞

鈴木 公生 殿

松山市南久米町

一四九一五一四〇六

(昭和四十四年卒)

☆瑞宝双光章

教育功労賞

山本 光博 殿

新居浜市松神子市一七七一三二

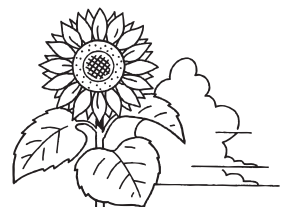
(昭和四十四年卒)

教育功労賞

池田恩四郎 殿

大洲市菅田町菅田甲七五〇一四

(昭和四十四年卒)





文芸

川柳

小噴火

仙波 弘子

(昭三三卒)

巢立つ日の痛みを包む春の泥
 旅立ちのブルーを葉桜が溶かす
 爪先立ちして春へ接岸試みる
 全山桜ぼつんと兵の墓がある
 桜吹雪母は空から手に受ける
 桜闇ムンクの声が湧いてくる



小噴火しては

まっすぐ
 生きている
 草苑

人間の悟り雪解け水が湧く

写経百巻ひとはひたすら青を追う

二人三脚静かにほどけゆく冬日

小春日へ一筆箋を膨らます

愛の波紋にわたし万葉人になる

終の日のドレスこっそり編んでい

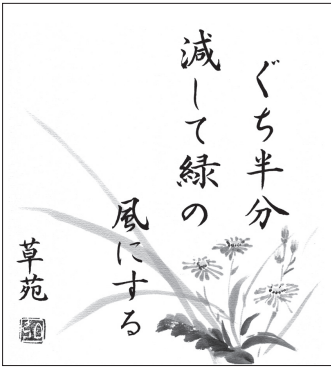
る

ぐち半分減して緑の風にする

冴えるまで私の石に水を遣る

小噴火してはまっすぐ生きてい

(791-0244) 松山市水泥町九一九



ぐち半分減して緑の

風にする

草苑

絵手紙

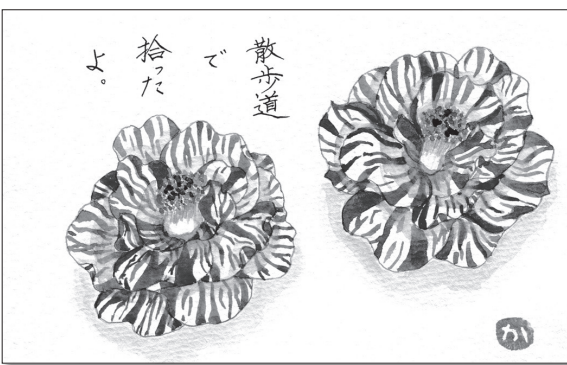
とりとめのないことを 考えながら

田中 勝子

(昭五〇卒)

庭先に、貧弱なブルーベリーがある。三月上旬のこと、木のまたに、青黒く短いひもが引つ掛かっていた。風で飛んできたのだな。のけようとして跳び上がった。かすかな湿り気と重み、そして、不気味な感触があったからだ。それは、息絶えたトカゲの子供であった。かわいそうに、やっと地上に出たばかりで、モズの「はやにえ」にされてしまったのであろう。ということとは、今年も、モズがやって来ているのか。トカゲには悪いけれど、何だかうれしい気持ちにもなった出来事であった。

ところで、我が家には、アボガドの木もある。種から育てたものだ。以前は、無縁の食材であったが、栄養が評価され、安価でもあるので、時々購入するようになった。そして、その度、種を埋めていた。あの存在感のある種を見た



ら、植えずにはいられなかつた。しかし、百発百中、芽が出るので、さすがに困って、今はやめている。アボガドの種を見ると、思い出すことがある。それは、在職中だった頃、給食にビワが出た時のことだ。一人の男の子が、種を大事そうにティッシュにくるんで、持ち帰ろうとした。家で植えるとのこと。それを見た、他の児童全員が同じようにした。ビワの大きな種には、そんな魅力があったのだらう。三十年近く前のことである。南方系のアボガドは、全く実をつける気配はない。しかし、子供たちが植えたであらう、ビワの種は、もしかしたら、りっぱに育



エビネ、小窓ながら

力強く美しい

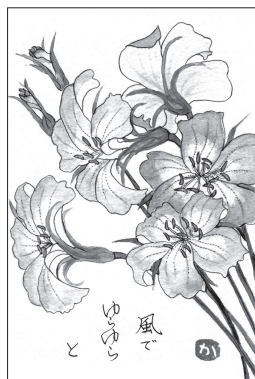


桜

近くも
いいね



春はばんに
咲くよ



風で
ゆゆらと

(791-3102) 伊予郡松前町北黒田 七三八

ち、たわわに実っているかもしれない。そんな、とりとめのないことを考えながら絵をかいている。

俳句

山畑半分

三好 靖子

(昭三三卒)

山裾を広げておりぬ花菜の黄
 初蝶のしばらく待ちて風に乗る
 昼の月辛夷の中に紛れこむ
 飛花落花橋にも袂ありにけり
 春の星素数の先の先の先
 昨日より今日のががやく金鳳花
 振れ花素は篆刻家かもしれぬ
 暮れなづむ十葉にある山の冷
 烏瓜引いて山気の八方へ
 このあたり猿も来るらし柿落葉
 枯木中クレヨンいろの保育園
 笹鳴ける山畑半分いつも翳
 かなかなかかなかかなか飛行
 雲
 石鎚山の白き静けさ大根引く
 霜柱毀れゆくもの身の内に

——*——

篆刻家は掌に乗るほどの大きさの中に、宇宙を盛り込むことを理想として刀痕を追求している。凝縮された造形に気韻が宿ることを求めて制作に臨んでいるという。

今春、現代書道二十人展にて篆刻のインパクトに改めて見入っていた。あの草花を思い出して……以前、必要に駆られ遊印に挑戦したことがある。とても刃が立たなかった。一本の刀痕が引けな。もつとよい道具はないものかと……。しばらくしてひよいと出たのがこの一句であった。

「振れ花素は篆刻家かもしれぬ」子規顕彰全国俳句大会で能村研三特選句であった。

「振れ花は小さな花がたくさん螺旋状に咲き上っていく。上方は



振れたようになる。そこに付く花も巻きながら昇っていく。こんな緻密な咲き方は篆刻家の細かな作業にも通じるものがある……。』と句評をいただいた。

公民館活動の一環である句会に参加して二十余年。俳句の材料を得る場所は夫の開墾した山畑であった。自然には限りなくサイクルを繰り返す四季があり、人の世を遠くして畏敬を呼び起こす何かがある。創意の源となっていたかもしれない。

この山畑の維持は放念。今はただ句会に吟行に、俳句仲間との楽しい時間のつづくことを願っている。

(☎) 790-0911 松山市桑原二一五一二



短歌

風吹けばいたくもゆる、波の上さやかに伊豆の天城山見ゆ

夜をこめて外の面の蛙鳴きやまずこの通夜の夜を蛙鳴きやまず

連翹に雨しと、降る春の宵をち方人のそゞろこひしき

みすゞ刈る木曾のはざまに見し駒はたけ低ければいとしかりけり

鉾杉の吹雪にけふるふるさとの山のため、ずまひまなかひに見ゆ

夜もすがら背戸の小藪に降る雪をききつ、子らを思ひますらむ

我らあらぬ家守ります老いらくの母のこほしも木犀の花

天放居士の遺愛の蘭の薫れるを日ごとにみつ、楽しくもあるか

珍しく雪降りつめばひたむきに雪つぶて投げて子供ら遊ぶ

や、すこし凍てし雪道高下駄をはきてぞ歩く幾年ぶりならむ

見はるかす幾山波のいやはてに天にそそりて不二の山みゆ

白楊のまろ葉まる葉のひとつひとつ風にさ、めく五月晴かな

むらぎもの心いらいらだてば今日もひねもす字をならひけり

時事有感
 心中の憤ろしさされどこは人に言ふべきことにはあらじ

紀元二千六百年元皇
 新しく興る亜細亜の勢をしめさんとてか今日の朝あけ

力強く踏み出すべしをのこわれものなべて新しき年の始ぞ

真珠湾攻撃の写真を見て
 海ゆかば水漬く屍と大空ゆ真一文字と飛び下りけむ

たまきはる命絶えむと幾度か父母の名を呼びにたりけむ

乏しきを堪へてをあらな国を挙げていくさ勝つべき時は来向ふ

林傳次先生遺稿集「把翠」より

林傳次先生遺稿集「把翠」より

会員の声



教員人生は最高じゃったわいね

—海外日本人学校勤務の巻—

寺尾満寿男

(昭四九卒)

満六十五歳、前期高齢者突入を記念して母校に寄稿する。後輩たちの今後の生き方の参考にしてくだされば幸いである。四十二年間の小中学校教員生活で最も印象に残るのが、海外の日本人学校での二度にわたる勤務である。初めは、三十歳でインドのボンベイ(現ム



北京 世界公園で散歩

ンバイ) 日本人学校、二回目は、六十一歳で中国の北京日本人学校である。それぞれ三年間の任期で、生死を彷徨う体験もしたが、最後は「あの時が最高じゃった!」と心から思う。

ナマステ! ムンバイ日本人学校の子どもたちは灼熱地獄の中、勉学によく励み、休み時間になると狭い校庭を飛び回っていた。そのたくましさは舌を巻いた。時折、家庭から「やっと熱が四〇度以下がりました」と教え子の病状の報告を受けることがあった。後で病名を聞くことチフスに罹っていたとのこと、高温多湿のムンバイの衛生状態は劣悪だった。当時は病原菌の宝庫と言われていたほどだ。宗教上(大半がヒンズー教徒)

生き物を殺すことは御法度で、たとえ病原菌を媒介する鼠や蠅、ゴキブリでさえも殺生は許されないのだ。同伴家族の三歳の娘はマラリア、一歳の娘は赤痢、私自身もA型肝炎を患った。元気だったのは妻だけで、母の強さを改めて思い知った。この強烈な体験が、後の教員人生をいい方に変えた。私は家族の絆をより強固なものにして、六十歳の定年を迎えるまで、どんな病原菌にも負けない丈夫な体と、どんな苦勞にも耐え得る精神力を保持することができたのだ。インドは「いーんど!」である。

ニーハオ! 北京日本人学校の子どもたちは大気汚染の中、勉学によく励み、休み時間になると狭い体育館を飛び回っていた。校庭ではマスクをして鬼ごっこやサッカーに戯れていた。そのたくましさは舌を巻いた。厳しい環境下で生きる日本人の子どもたちが世界各地に存在する。PM2.5(微小粒子状物質)が高濃度るときは外遊び禁止となるが、子どもたちは「読書があるよ」と時間を忘れて本に没頭する。また、「ピアノや合唱があるよ」と仲よく練習に励んでいた。みんな思い思い



我的教員人生に悔いなし!

<http://www.ed.ehime-u.ac.jp/~dosokai/>

dosokai@ed.ehime-u.ac.jp

教育学部同窓会
ホームページへ
アクセスを!

教育学部同窓会
インターネット
開設しています!

↑
URLは上記

↑
メールアドレスは上記

支部活動、会合、イベント等のスケジュールなど、タイムリーに情報をお知らせします。
同窓会員同士の交流を深めるために、できれば、掲示板を設ける準備をしています。

お問い合わせ、会報への寄稿、住所、勤務先変更などの諸連絡にご利用ください。お待ちしております。

新採と指導教員の思い出



小野植元幸
(昭二九卒)

同窓会報一三三号。教育学部長佐野栄教授の挨拶の中に「地域の持続的発展を支える人材育成の推進」を中核として、教員養成することを要にされていることに同感である。

退職後二年間(二校)新採の指導教員をした。現職時三年間、新採と指導教員を受け入れた経験があり役立った。この時の採用教員(女性)は、一発で合格し教員としての人材で、何ごとも前向きな態度に指導のしがいがあった。週三回(月・水・金)午前中の勤務だったが、自主的に職員会、学校行事に参加して、校長の教育方針



松山城 (昭和28年10月)

や全教職員が新採を育てる体制制作りに努めた。私自身、教育の原点に立ち、教育に関する本を読み自己研修に努めた。講師や代員の経験がなく白紙の状態で二人とも主体的姿勢のため毎日が楽しかった。教師は「授業で勝負する」の信念で教材研究を核として、一人ひとりの児童に浸透させ「楽しい学習」に心血を注いだ。特に、一人ひとりを認め、褒める、言葉かけして日々教育をする大切さを教えた。教育法規、公務員としてのあり方、生徒指導、人権教育(現職時、同和教育主任)各行事、書類作成、保護者への対応等、指導することが多岐にわたった。研究授業も受けて立ち、現職の十年以上の勤務された教師も驚嘆させた。児童への生活態度にも、厳しく対応し躱され、新採当時の勤務を自己反省した。昭和二十年代は、戦後の混乱期、児童は、戦



松山駅 (昭和30年11月)
内子~松山間2時間半

時中の「産めよ、ふやせよ。」で、僻地でも、一軒に二人、三人は普通であった。児童のいない家が珍しく、僻地でも複式学級は数えるほどだった。先輩の後姿を見て学んだ。他校の研究授業は、唯一の機会だった。

指導教員二校目では、一年の経験を生かし、より効率的な指導に心がけた。新採とはおもえない勤務に心を打たれ、児童の可能性を伸ばす力があると信じ指導した。日々の授業、生活指導は素晴らしく、話したことが生きていた。口答だけでは定着しないため、研修ノートを作り記録させた。N先生より「感謝状」をいただきその中に(一)日記(二)日々の児童の評価の記録(三)新聞の切り抜き等、記録して残すことの大切さを学んだ。この研修ノートは、これからの勤務に何度か開く。感謝状には、「先生は、内子の父」の言葉に生きがいをもった。教員の大量退職時、採用も多い

が、この先十年後は、少子化のため学校統合が進められ、採用も激減する見通し、将来像を早急に描き、準備を進めていく必要がある。

会報の「職場だより」の若年教師が、何年も講師をして、その経験して、現場の様子に感動し、愛媛教育推進に敬服している。

全国の教員採用は、二〇一六年卒六〇%割れで、愛媛大は、前年比二・五ポイント減の六〇・六%。教員採用は、「冬の時代」に入るが、学生諸君は、あきらめず愛媛教育に尽力することを期待したい。

(☎) 791-3351
喜多郡内子町五百木 (一番)



松山NHK放送局見学(附属小6年生)(昭和28年11月20日)

表紙作品について

「地層」



作者
兵頭 一夫

何気ない日常の現実の中で、人間個々が常に内包する多様な不安感・不安定感をとらえながら、これといった複雑な意味を持たぬ形・色をあたかも無作為のように、さりげなく、それでいて鮮明に打ち出し、そこに、ある種の危うさのようなものが伝わればと思う。

画題「地層」(M50)は六年前(二〇一一年)東日本大震災直後に描きはじめた作品。テレビ等で目にした恐ろしい光景に衝撃を受け、触発され、ひたすら描いた。作品の良し悪しはどうでもよい気がしている。

略歴

昭三十八年 愛媛大学教育学部卒業
平 十三年 県立津島高等学校定年退職

現在

画家 無所属
愛媛県美術会会員

(☎) 798-0053
宇和島市賀古町二丁目
二一三六

「ロシア兵墓地」 清掃奉仕活動する



菅田 顕
(昭三四卒)

松山市御幸一丁目にある、不退寺と正法寺に挟まれた道を北へ三十m程進み、右折して、なだらかに続く坂道を東に向かって百m程上がっていくと、道路脇に「ロシア兵墓地」と書かれた立て看板が目に入ってくる。そのそばにある階段を南に向かって十五段程上がると、ワシリー・ボイスマン大佐の胸像と記念碑が目飛び込んでくる。



そしてその西側は霊園となっていて、そこには一九〇四年（明治三十七年）に起こった「日露戦争」で日本軍の捕虜となり、その内延べ六千人を超えるロシア兵士が松山の地に送還されてきたが、その



者の内、戦いで深手を負った者、戦場で重い病気を罹ってしまった者、祖国への帰還の希み叶わず、母国を偲びながら静かに息をひきとり、松山の地に埋葬された兵士九十八名の墓標が、整然として、故国北の方角に向かい凍



ところで、松山の「ロシア兵墓地」の物語だが、今から百十四年前、前述したように、松山に延べ六千人を超えるロシア兵捕虜が、当時三万人ほどの人口だった松山市に送られてきた。しかもその内、延べ四千人以上の者が傷病兵だった。

その傷病兵の病棟が必要になり、現在の愛媛大学城北キャンパス、松山市立東中学校、東雲小学校、日本赤十字病院あたり、当時は、松山歩兵二十二連隊の練兵場であった所に三十三棟ものバラック立ての病棟を建て、そこに収容、看護した。

特筆すべきは、当時の松山市民のロシア兵捕虜への「おもてなし」の姿だった。

そこには、明治三十二年（一八九九）日本国は世界の文明国と肩を並べる事として、三十の国と共にハーグ条約を締結し文明国の一員として認められようとしていたその五年後に、日露戦争が起り、三月には、早くもロシア兵捕虜が松山に送られてきた。そこで松山市はハーグ条約に則り、市民に「捕虜取扱心得」の訓令を出し、遵守することを徹底した。

それを受けた松山市民には、代々受け継がれている「お遍路文化」即ち「お接待、おもてなしの文化」が、脈々と流れていることである。そのことは、当時のロシア将校F・



クプチンスキー氏の「松山捕虜収容所日記」からも伺え、ロシア兵捕虜は松山での捕虜生活は日本兵士と変わらない程のもてなしを受け、道後温泉には自由に入浴が出来、近くの学校の運動会、自転車競争に参加し、芝居の観劇もしたりしていた。将校に至っては、借家に入り奥さんを迎え入れることが出来ていたと言う。だから、そのことを諸外国の記者によって世界中に報道されていたため、ロシア兵が日本軍に投降してくる時「マツヤマ、マツヤマ」と叫びながら投降してきたと言われている。

又、この日記の中に「今はロシア語の碑文が書かれた十字架……。捕虜兵がいなくなったら、これらの十字架は思い出として残るだろう。しかし、それも永くはもたないだろう。すでに腕白小僧達が十字架を壊している。埋葬する人もいなくなり、墓地を清掃に来る人もいなくなったら、ここ松山で亡くなった人たちの思い出

もやがて消えてしまうだろう。」と。

病棟の北側にある山越の山腹に埋葬されたロシア兵士の霊は、その後の激動していく日本国を静かに見守ることになる。その後起こった日華事変、そして日本国存亡の危機に至った太平洋戦争、そして敗戦までの終戦。そのため墓地は殆ど放置されていた状態であった。

しかし、戦後十五年経った一九六〇年（昭和三十五年）松山市が今ある土地を買収し、散在していた墓地を一つにまとめた。それを知った道後婦人会や老人会が立ち上がり、お彼岸を中心にお花を生けたり、墓地周辺の世話を献身的にしていた。

それから二十三年経った一九八三年（昭和五十八）当時、勝山中学校教頭だった京口和雄氏（初代「ロシア兵墓地保存会」会長）が立ち上がり、生徒会に働きかけ、墓地清掃が始まった。





その活動は、三十四年経った今も、生徒会が確りとその伝統行事を受け継いでいて、毎月の第二土曜日には、生徒会を中心に、毎回百三十人を越す生徒が自主参加し、嬉々として奉仕活動をしている。

百十三年経った今、このクプチンスキー氏の悲観的な予想とは裏腹に、ロシア兵の墓地は、松山の人々が「もてなしの心」でもって墓地保存活動に励んだ結果、写真でも分かるように、今は松山市の管理の下に清掃の行き届いた墓地として凜とした雰囲気を見せている。

二〇〇三年（平成十六年）には、時の総理大臣小泉純一郎氏が、勝山中学校の生徒会と共に墓地を訪問している。そして、翌年の二〇〇四年（平成十七年）には、「ロシア兵墓地百年の百回忌記念法要式典」が挙行されている。

二〇〇八年には、墓地が現在のように、雑草に悩まされることなく墓地を改修し、厳かな雰囲気さ

え漂わせ、静かな佇まいになっている。今、「ロシア兵墓地」清掃の一翼を担っているのが、私達「木曜会」である。清掃活動は毎月の奇数週の木曜日に、午前十時三十分までに現地集合している。メンバーは、墓地近郊の味酒、清水、湯築校区に住む山口さん、増井さん、藤本さん、矢野さん、細かく行き届いた目配りが出来る紅一点の寺坂さん、そして私の六名で構成している。

何時も集合時間には、各自自主的に清掃活動が始まっている。ボイスマン大佐の胸像前の花立てを始め、百箇程ある花立てにも一つ一つ花を生ける者、箒、ちり取りを持ってそれぞれバランス良く墓地を清掃する者、トイレやその周辺を清掃する者、階段を清掃する者と、実にてきぱきと、そして嬉々として活動をしている。何時も感じる事だが、それぞれのお墓の廻



りを掃除していると、墓標から何か話しかけられているような感じが何時もなることである。

又、その清掃活動中に、此のロシア兵墓地を全国各地から訪問して来る心ある方々との出会いがある。その時は全員がそれぞれの場所ので気軽にガイドとなって対応する。一緒に記念写真も撮ったりする。そして、帰郷してもメールを送ってきたりもされる。

この六名全員校長職経験者である。現職時代は学級経営、教科等の指導、経営、そして学校経営等に於いて、生徒や先生、保護者、地域の方に対して、人権問題、自由平等、戦争と平和について、そして、国際教育に関して、語りかけ、指導し実践をしてきている。このロシア兵墓地清掃活動は、再度それを身を以ての具現化の証ではないかと、毎回体感している。

清掃諸活動が終わると、墓地の北隅にある二つのベンチに座り、掃き清められた墓地、墓標に語りかけるように暫く談笑する。

そして、清々しい気持ちで以て墓地に黙礼して、階段を降りながら次回木曜日活動予定を確認し、心豊かな気持ちで墓地を後にしていく。まさに、「もてなしの心を紡ぐ」心となって、充実感に包まれる一時を「木曜会」は過ごしている。



【付記】
何故、ワシリー・ボイスマン大佐の胸像が、この墓地にあるのか。

大佐は、日露戦争時に旅順艦隊の戦艦ペレスヴェートの艦長で、海戦時、日本軍の砲撃で戦艦が被弾、大佐も負傷し、捕虜となる。重傷のワシリー艦長にハーグ条約に基づき帰国するように促したが、捕虜となつた部下達は松山に送られるのを聞き、「私一人が部下達を残して、何で帰れようか。」と辞退した。そして部下と共に松山の地へ、しかも部下達の病棟に入り、部下と共に治療に専念していた。その姿勢、言動を見聞した大勢の松山市民は、大佐こそ「ロシア人の武士道」まさしく「大和魂」に通じるものがあると賞賛し敬意を払ったと言われている。しかし、大佐は治療に精進したにもかかわらず、一九〇五年九月二十一日に帰らぬ人となった。大佐の葬儀には、六〇〇人を超す松山市民の参列があったと、当時の語りぐさとなっていたほど

だった。

その後、時が経った平成五年（一九九三年）ロシアの戦争歴史作家ヴァイタリー・グザノフ氏が来松し、このロシア兵墓地を訪問した。その時、墓地の案内役をした京口和雄初代保存会会長さんが、墓地の説明をする中で、特にボイスマン大佐の話を詳しく説明した時、グザノフ氏は、会長さんの話を聞きながら感動の涙を流した。

グザノフ氏帰国後、京口会長さんに連絡があり、「松山での京口会長さんのお話を聞き、そしてロシア兵墓地の保存活動を献身的にされていることを知り非常に感動しました。そこで、その感謝の意味も含め是非ともボイスマン大佐の胸像をお贈りしたいと考えているのでどうか宜しくお願ひします。」との連絡が入った。そこで京口会長も快諾の旨を連絡した。その後、ロシアでの胸像作家として、ムバチョーフ氏が決まり製作中との連絡があった。

そして、完成した胸像を、京口会長自ら遙々ロシアのモスクワの地まで出向いて行って、直接グザノフ、ムバチョーフの両氏にお会いし、深く謝意を表した後、モスクワから直接ご苦労されながら松山のロシア兵墓地へ運びました。

そして、平成六年（一九九四年）十月二十五日にボイスマン大佐の胸像除幕式があり現在に至っています。

溝口兢一先生の死を悼む



吉原 宏文
(昭四二卒)

愛媛大学名誉教授の溝口兢一先生が、昨年末(平成二十八年十二月十八日)肺癌の再発で急逝された。享年八十四歳であられた。敬愛する先生の急逝は、私の人生観を一変してしまふほどの大きな衝撃であった。先生は京都大学哲学

科を卒業され、長く愛媛大学文学部の教授として活躍された。特に、カントやハイデッガーなどのドイツ哲学を専門としておられた。創文社出版のハイデッガー全集第二十四巻「現象学の根本諸問題」の日本語訳を担当され、奇しくも先生の遺作となった。先生とも不思議な御縁で、私が広島県呉市音戸町の浄土真宗西本願寺派のお寺(法専寺)で役僧をしていた当時、「愛媛大学を定年退官され、現在、京都の龍谷大学の特任教授としてハイデッガー哲学を教えられている。」という情報を得て、先生に論文のコピーとお手紙を差し上げたところ、特別に聴講を許された。以来、平成十年秋から実質約一年半、毎週火曜日・日帰りで、ハイデッガーの名著「存在と時間」の原典(ドイツ語)購読に

出席した。これも、役僧生活の御蔭であった。ハイデッガーの研究ノートは、実に八十冊にもなっており、今も私の至宝として書棚に飾られている。先生は、一昨年春、亡くなられた奥様の看病疲れを感じて健康診断に行かれたところ、肺病が見つかり手術を受けられた。その後いつたん回復されたが、昨年末再発し急逝されたのである。一昨年と昨年の、それぞれの夏・二回、先生の快気祝いも兼ね、私が佛教大学の大学院生であったとき紹介され、今も私淑している京都大学名誉教授の荒牧典俊先生(仏教学専攻)と共に、溝口先生の実家がある兵庫県加古川市の、駅前レストランで会食しながら、両先生の貴重なハイデッガー論議を拝聴させてもらった。荒牧先生は、日本でも有数のハイデゲリアンで、ドイツのナチズムによる批判から、ハイデッガーを擁護されるのに懸命で、私も大きな影響を受けた。

さて、溝口兢一先生は、愛媛大学で、学長補佐(現・副学長)もされ、いつも愛媛大学全体のことを心配されておられた。同窓会報第一二三号の拙文「升田栄先生を偲ぶ」の草稿を読んでいたとき、先生の方から二度もお電話があり、文章の不適切な個所の表現を直すように指摘され、また難しい漢字にはルビを打つように教示され、読み易い文章になったと思う。しかし、会報の完成版を待たずに、先生が亡くなられたことは、ただただ痛恨の極みである。

最後に、升田栄先生について書いた私の文章を何度も読み返すたびに、新しい発見があり、升田先生の真価が輝き出し、同時に私のカント哲学の理解も深まっている。そして、このように升田先生の御供養に四十年もの時間が掛かったことをお許し願うばかりである。升田先生も、今、天空に飛翔されたと信ずるのである。また、私が教育学部の小学校教員養成課程で学んだことが、かえって、私の勉強の独自性の強固な地盤になっていたことを感謝するのである。それにしても、今後は、小学校教師も英語を教えなければならなくなると感じている。このたび、愛媛大学校友会の中国支部設置委員会が催され、私も教育学部の代表として参加しました。各学部の枠を越え、大学全体としての、まだ若い「愛媛大学」が力強く成長していくことを願って、私も応援したいと思えます。

平成二十九年三月六日

放送大学入学生募集のお知らせ

放送大学では、平成二十九年十月入学生(教養学部、修士選科生・科目生)を募集中です。
(募集期間) 六月十五日～九月二十日

放送大学は、テレビなどの放送を利用して自宅で学べる通信制の大学です。

放送大学では、心理学・福祉・文学など、幅広い分野を学べますが、同窓会員特に現職の方々には、次に掲げる教育関係の免許資格取得などができます。

○ 放送大学の大学院を利用し、**専修免許状**の取得が可能です。

○ 放送大学の科目を利用して、**特別支援学校教諭免許状**の取得が可能です。

○ 放送大学の科目を利用し、**司書教諭資格**の取得が可能です。

○ 放送大学の講習を受講して、**教員免許更新**が可能です。資料を無料でさし上げております。お気軽に、**愛媛学習センター**にご請求ください。



放送大学

教養はエネルギーだ。
一科目からでも学べます

平成29年度10月入学生募集中!
(平成29年9月20日まで)

問合せ先 **愛媛学習センター**
TEL 089-923-8544

●インターネットで資料請求・出願できます。 ●資料請求専用フリーダイヤル
放送大学 www.ouj.ac.jp 0120-864-600

まちなか大学

mit まちなか大学とは、サテライト分室「mit」にて開講する市民向けの講座です。この講座は、いままでの公開講座のようにまとまった時間をとれなくても受講しやすい時間帯を設定し、開催場所は市街地にあるサテライト分室「mit」とすることで足を運びやすい身近な講座を目指しています。この講座が身近な講座であることは、時間や場所といった条件だけでなく、「テーマ設定」にもあります。この講座のテーマは、市民の要望を考慮して生活に密着しているもの、その時々話題性に富んでいるものをピックアップしています。受講料は基本的には無料です（資料代等実費が必要な場合もあります）。



学部
トピックス

ふるってご参加ください。

過去実施されたまちなか大学のテーマ



愛媛らしいお酒を考える
～しづく媛を中心に～



松山盛り場考シリーズ①
～大街道の過去・現在・未来～



in 四国中央市
～地方都市の国際ビジョンを考える～

ホームカミングデイ

ホームカミングデイは、卒業生の皆様や退職された教職員の方々と大学にお招きし、大学の現状の紹介、在校生や教職員との交流及び大学の施設や学生祭の見学などをとおして、母校へのご理解を深めていただくことを目的としています。

卒業生はどなたでも参加可能です。皆様の参加をお待ちしております。

The 8th
**HOME
COMING
DAY**

第8回 愛媛大学ホームカミングデイ
愛大はあなたにあいたい
平成29年11月11日(土) 13時～ / 愛媛大学城北キャンパス

開催日時・場所

日 時：平成29年11月11日(土) 13時～

場 所：愛媛大学城北キャンパス

詳細は決まり次第、随時お知らせいたします。

平成29年度
支 部 長 会 報 告

1. 日 時 平成29年6月17日（土） 14：30～16：00
2. 場 所 愛媛大学校友会館（松山市文京町3）2F 大会議室
3. 日 程
- (1) 開 会 挨拶 会長・学部長
 - (2) 各支部長 挨拶
 - (3) 議長選出
 - (4) 議 事
 - ア 会則改正について
 - イ 役員改選に関する件
 - ★ 新旧役員挨拶
 - ウ 平成28年度行事報告
 - エ 平成28年度決算報告・監査報告
 - オ 平成29年度行事計画
 - カ 平成29年度予算案審議
 - キ 支部活動と助成金について
 - ク その他事務連絡
(内規に関する事項・会報発送・会館利・名簿 等)
 - (5) 閉 会 挨拶 副会長



4. 主な話し合い事項

(1) 支部活動の活性化について

各支部長に前もって依頼していたアンケート等による提言を元に、支部活動をいかに活性化するかについて時間を掛けて話し合われた。昨年度も南宇和支部で「落語文化の普及を図る」のかけ声の下、地域の方々と協力し、古今亭菊志ん師匠をお招きし、大変盛会だったので、その経過報告を支部長にいただいた。

このように各支部とも予算が位置づけられているので、積極的な活動を公民館等と協力して計画してみてもとの提言があった。（支援依頼書提出締切7月21日とした）

(2) 教育学部と同窓会との連携活動について

平成24年度より予算にも位置づけ、教育学部では「サポーター制度」を設け、同窓生に働きかけ、講師になってもらい「コミュニケーション能力の育成」をテーマに、学生達に講演している。その活動の様子報告は会報を通じて行っている。非常に学生に好評であり、今後とも学部と同窓会との絆を強めるため同窓会は協力をしようと意志決定した。（その活動の様子は同窓会報に掲載されている）

(3) 「支部活動特別助成金」について

支部活動をより活性化するための具体的な方策として、上記にある「支部活動特別助成」を配慮している。その為の資料として、「支部活動特別助成金交付要綱」と「申請手続き」を紹介した。

(4) 今年度新しく、4人の新理事をお迎えした。理事選出も東・南予からも、もう少し多く選出してはとの意見があった。

(5) 今回に於いても来る愛媛国体に備え、同窓会としてもどうサポートするか考えてほしいとの提案があった。

(6) 第8回愛媛大学ホームカミングデーに関しても話し合われた。

平成28年度 行 事 報 告

平成29年度 行 事 計 画

4. 6 (水)	平成28年度入学式	学部生 170名 院生 55名
4. 14 (木)	平成27年度会計監査	監査実施
5. 12 (木)	第1回常任理事会	役員改選・同窓会活動・支部活動について
5. 22 (日)	第1回理事会	平成27年度行事、決算報告 平成28年度行事計画及び予算審議 役員改選案について審議
6. 4 (土)	同窓会懇親会世話人会	各期代表世話人による懇親会運営話し合い
6. 11 (土)	支部長会	平成28年度本部役員改選 平成27年度行事、決算報告 平成28年度行事計画及び予算審議
6. 11 (土)	第1回編集委員会	会報122号 校正
7. 1 (金)	同窓会報122号発行	8,300部
7. 28 (木)	第2回常任理事会	同窓会懇親会運営推進対策について
8. 6 (土)	第2回理事会	同窓会懇親会運営推進対策について
8. 20 (土)	第15回教育学部同窓会懇親会	松山全日空ホテル4Fダイヤモンドボール
9. 13 (火)	第3回常任理事会	懇親会反省報告、後期諸計画、次年度活動について
10. 29 (土)	支部活動支援・援助	南宇和支部 爆笑僧都寄席
11. 12 (土)	第7回愛媛大学ホームカミングデー	教育学部同窓会参加 16名
11. 29 (火)	学部サポーター制による講義	山下優子氏 (NPO法人シクロツーリズムしまなみ代表)
1. 7 (土)	第3回理事会	年間行事の反省 新年度諸計画について
1. 11 (水)	第2回編集委員会	会報123号 校正
2. 1 (水)	会報123号発行	8,300部
3. 3 (金)	第4回常任理事会	28年度行事活動反省、次年度重点活動目標設定について
3. 24 (金)	平成28年度卒業式	卒業生学部生 250名 院生 50名

4. 6 (木)	平成29年度入学式	学部生 169名 院生 49名
4. 14 (金)	平成28年度会計監査	監査実施
5. 12 (金)	第1回常任理事会	役員改選・同窓会活動・支部活動について
5. 27 (土)	第1回理事会	平成28年度行事、決算報告 平成29年度行事計画及び予算審議 役員改選案について審議
6. 10 (土)	第1回編集委員会	会報124号 校正
6. 17 (土)	支部長会	平成29年度本部役員改選 平成28年度行事、決算報告 平成29年度行事計画及び予算審議
7. 1 (土)	同窓会報124号発行	8,300部
7. 21 (金)	支部活動支援・援助申込締め切り	各支部に於て教育学部名で後援・賛助出来るもの
7. 28 (金)	第2回常任理事会	同窓会運営推進対策について
8. 5 (土)	第2回理事会	同窓会運営推進対策について
9. 15 (金)	第3回常任理事会	中間活動反省報告、後期諸計画、次年度活動について
11. ()	学部サポーター制による講義	
1. 6 (土)	第3回理事会	年間行事の反省 新年度諸計画について
1. 11 (木)	第2回編集委員会	会報125号 校正
2. 1 (木)	会報125号発行	8,300部
3. 2 (金)	第4回常任理事会	29年度行事活動反省、次年度重点活動目標設定について
3. 23 (金)	平成29年度卒業式	学部生 名 院生 名

平成28年度 決 算 書

平成29年度 予 算 書

(収入の部)

(単位：円)

費 目	本年度予算	本年度収入	増 減	摘 要
1. 会 費	3,900,000	3,900,000	0	予定入会者 (170名+25名) @20,000
2. 寄 付	200,000	326,452	126,452	寄付金等
3. 雑 収 入	3,500	2,952	△ 548	利息等
4. 繰 越 金	2,111,068	2,111,068	0	
計	6,214,568	6,340,472	125,904	

(収入の部)

(単位：円)

費 目	本年度予算	昨年度予算	増 減	摘 要
1. 会 費	3,900,000	3,900,000	0	予定入会者 (169名+26名) @20,000
2. 寄 付	200,000	200,000	0	寄付金等
3. 雑 収 入	2,500	3,500	△ 1,000	利息等
4. 繰 越 金	1,409,748	2,111,068	△ 701,320	
計	5,512,248	6,214,568	△ 702,320	

(支出の部)

(支出の部)

費 目	本年度予算	本年度支出	増 減	摘 要
1. 会 議 費	500,000	397,778	102,222	支部長会・理事会
2. 旅 費	650,000	502,200	147,800	支部長会・理事会
3. 印 刷 費	1,260,000	1,336,992	△ 76,992	会報年2回
4. 通 信 費	410,000	297,932	112,068	会報発送、連絡費
5. 慶 弔 費	150,000	70,000	80,000	
6. 給 与 費	800,000	800,000	0	
7. 備 品 費	110,000	62,920	47,080	PC・プリンター機器
8. 消耗品費	150,000	86,437	63,563	封筒、ラベル、コピー代等
9. 支部助成費	500,000	411,600	88,400	
10. 卒業記念費	450,000	437,400	12,600	電波時計付フォトスタンド
11. 国際交流基金	250,000	250,000	0	
12. 支部活動支援費	520,000	143,300	376,700	芸能・文化支援
13. 学部活動支援費	250,000	30,864	219,136	学部サポーター活動支援等
14. 積 立 費	0	0	0	
15. 雑 費	140,000	103,301	36,699	学生アルバイト代、事務手伝い謝礼
16. 予 備 費	74,568	0	74,568	
計	6,214,568	4,930,724	1,283,844	

費 目	本年度予算	昨年度予算	増 減	摘 要
1. 会 議 費	450,000	500,000	△ 50,000	支部長会・理事会
2. 旅 費	550,000	650,000	△ 100,000	支部長会・理事会
3. 印 刷 費	1,350,000	1,260,000	90,000	会報年2回
4. 通 信 費	350,000	410,000	△ 60,000	会報発送、連絡費
5. 慶 弔 費	100,000	150,000	△ 50,000	
6. 給 与 費	800,000	800,000	0	
7. 備 品 費	80,000	110,000	△ 30,000	PC・プリンター機器
8. 消耗品費	120,000	150,000	△ 30,000	封筒、ラベル、コピー代等
9. 支部助成費	450,000	500,000	△ 50,000	
10. 卒業記念費	450,000	450,000	0	電波時計付フォトスタンド
11. 国際交流基金	250,000	250,000	0	
12. 支部活動支援費	250,000	520,000	△ 270,000	芸能・文化支援
13. 学部活動支援費	150,000	250,000	△ 100,000	学部サポーター活動支援等
14. 雑 費	120,000	140,000	△ 20,000	学生アルバイト代、事務手伝い謝礼
15. 予 備 費	42,248	74,568	△ 32,320	
計	5,512,248	6,214,568	△ 702,320	

平成 29 年度 役 員 表

愛媛大学教育学部同窓会

本	顧問	佐野 栄・奥 定一 孝		監 事	矢野 裕 司		常任幹事	阿 部 修 一
	会 長	高 橋 治 郎			相 原 孝 裕			
部	副 会 長	立 入 哉	峯 本 高 義	村 上 朋 子	菅 田 顕		山 本 千 鶴 子	
	理 事	青 野 多 喜 夫	長 野 照 道	山 下 雅 司	菊 川 國 夫		満 田 泰 三	
		村 上 嘉 一	鎌 田 サチ子	和 田 和 子	阿 部 晋		垂 水 葉 子	
		井 出 節 雄	後 藤 陽 三	前 田 拓	丸 山 祐 樹		辻 井 芽 美 子	
		白 石 久 美 子	山 上 千 津	渡 邊 恵 理	古 鎌 幸 一		今 永 晴 香	
	森 山 由 香 里							

支 部 名	支 部 長		副 支 部 長		副 支 部 長	
	川之江・新宮	日 浦 正 文	金生第一小	野 村 浩	新宮小・中	仲 公 一
伊予三島	鈴 木 恵 子	豊 岡 小	高 橋 浩 二	中曾根小	原 田 尋	中之庄小
土 居	越 村 慎 治	土 居 小	高 橋 竜 貴	土 居 小	高 木 淳	関 川 小
新 居 浜	中 野 久	若 宮 小	中 川 昭 二	垣 生 小	畑 野 一 恵	若 宮 小
西 条	久 門 宣	橘 小	千 羽 達 也	飯 岡 小	山 本 直 子	橘 小
東予・周桑	越 智 恵 理 子	丹 原 小	黒 河 典 彦	吉 井 小	磯 明	元ひまわり幼
今 治	瀬 野 美 千 代	波 方 小	高 橋 隆 司	今 治 市 教	別 府 健 二	国 分 小
今 治・越智	田 邊 正 憲	岩 城 小	菅 昭 彦	上 浦 小	高 井 剛	大 西 中
松 山・北条	藤 原 愛 明	栗 井 小	尾 脇 康 資	立 岩 小		
松 山	矢 野 裕 司	味 生 小	井 藤 留 美	北 久 米 小	笹 本 太 三 郎	椿 中
東 温	八 木 良	重 信 中	今 西 俊 介	西 谷 小	藤 原 雅 彦	南 吉 井 小
伊 予	橋 本 佳 史	由 並 小	篠 崎 邦 裕	郡 中 小	松 浦 博 文	下 灘 小
上 浮 穴	大 久 保 秀 司	美 川 小	段 王 繁 嘉	畑 野 川 小	川 西 潤	美 川 小
大 洲	小 倉 和 芳	肱 東 中	白 石 清 美	平 小	楠 部 昭 彦	平 野 中
喜 多	山 田 眞 市	大 瀬 小	清 水 輝 昭	五 十 崎 小	金 築 治 美	立 川 小
八 幡 浜	甲 野 正 人	神 山 小	脇 坂 耕 三	真 穴 中	梶 原 章 代	千 丈 小
西 宇 和	竹 上 正 也	大 久 小	三 好 則 史	伊 方 小	上 田 徳 彦	瀬 戸 中
西 予	中 村 眞 紀 子	明 浜 小	井 上 健	野 村 中	片 山 文 彦	大 野ヶ原小
宇 和 島	矢 野 淳 一	和 霊 小	中 村 米 貴	遊 子 小	岡 田 雅 彦	和 霊 小
北 宇 和	布 博 文	松 野 南 小	酒 井 隆 仁	松 野 南 小	松 本 和 美	近 永 小
南 宇 和	清 水 二 十 志	東 海 小	若 松 隆 仁	城 辺 小	清 水 美 和	平 城 小
附 属	渡 邊 恵 理	附 特 別 支 援				

県外支部	東 京	兼 頭 吉 市	山 下 正 洋	森 孝 枝
	京 都	河 野 直 樹		
	大 阪	神 垣 鉄 雄	本 宮 久	杉 山 容 子
	神 戸	木 原 孝 造	平 山 昇	加 登 康 智
	岡 山	神 崎 順 治		

編集委員	菅 田 顕	峯 本 高 義	菊 川 國 夫	村 上 朋 子	山 下 雅 司	阿 部 修 一
------	-------	---------	---------	---------	---------	---------

原稿募集

—次号 第百二十五号—

短くても結構です。多くの方々のお気軽なご寄稿をお待ちしております。

○「会員の声」・「今、教育に思うこと」について、ふるってご投稿ください。

★ 同期会や支部同窓会などの集会や活動について

★ 恩師・先輩・同僚の訪問や思い出について

★ 職場の近況や所感や活動について

★ 文芸(随想・俳句・川柳・短歌・詩・絵手紙等)について

★ 会員便り

1 旅行記 4 この頃思うこと

2 季節便り 5 忘れ得ぬ人など

3 教育雑感

※ 投稿が多数になった場合には、編集委員会で選ばさせていただきますので、ご了承ください。

★ 原稿メ切 十一月三十日

★ 発行 二月一日 予定

★ 依頼者以外は千二百字厳守

★ 写真 筆者の顔写真を添付してください。顔写真以外で内容に関連した写真もあれば送ってください。

会報の送料納付

について

平成二十九年二月号でもお知らせしましたように、会報の個人宛発送は、送料を各自で負担していただくことになっております。

出費多端の折柄恐縮ですが、未納の方は、左記要領で納付方お願い申し上げます。

記

①一年間五〇〇円で、二年間分ずつ収めるようになっていきます。

②二年ごとの更新は、煩いので、何年間かを、まとめられる方もあります。

納付期限 毎年三月三十日までとし、二年毎に更新する。

送金方法 郵便為替・現金書留・郵便振替で

振替口座番号

送り先 〇一六四〇一七二七五四 七九〇一八五七七 松山市文京町三

愛媛大学教育学部同窓会

領収書は、振替用紙をもって、かえさせていただきます。

会報送料・寄付者名

平成29年1月～5月

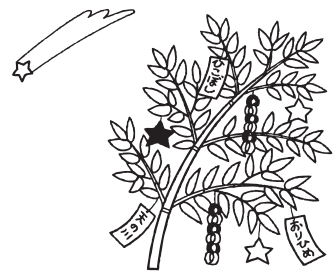
高市 史一	竹井 薫樹	塩崎 保徳	西川 隆徳	古田 久隆	大野 幸一	本宮 森子	佐伯 公子	二宮 康子	仙波 一夫	兵頭 成子	加藤 心文	鳳上 博彦	杵上 文彦	須之内 勝潤	岡田 潤
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	------



敬弔

(物故会員)

29.1.16	29.1.12	29.1.8	29.1.1	28.12.31	28.12.31	28.12.31	28.12.25	28.12.14	28.12.8	28.12.2	28.12.	28.8.28	28.6.30	(死亡年月日)
野口ハツミ	藤田五郎	三宅泰	村井弘	合田茂秋	稲見和正	藤本明	山上進	伊藤深	三好亮三	村上夫	平井威	松浦嘉雄	八束繁直	(氏名)
(昭30・愛大)	(昭30・愛大)	(昭24・愛師研究科)	(昭32・愛大)	(昭24・愛大)	(昭35・愛大)	(昭25・青師女子)	(昭19・本科)	(昭13・本科二)	(昭42・愛大)	(昭22・本科)	(昭23・本科)	(昭23・愛大)	(昭20・青師女子)	
29.2.15	29.2.13	29.2.5	29.2.3	29.2.30	29.1.29	29.1.27	29.2.15	29.2.13	29.2.5	29.2.3	29.1.30	29.1.29	29.1.27	
白石俊明	三木徳壽	梶原薫	林志郎	梶志行	松浦嘉雄	八束繁直	梶原薫	三木徳壽	梶原薫	林志郎	梶志行	松浦嘉雄	八束繁直	
(昭31・愛大)	(昭18・本科一)	(昭24・青師)	(昭23・青師)	(昭26・愛大)	(昭23・愛大)	(昭20・青師女子)	(昭24・青師)	(昭18・本科一)	(昭23・青師)	(昭23・青師)	(昭26・愛大)	(昭23・愛大)	(昭20・青師女子)	



シンポジウム「愛媛とロシア・オレンブルグの交流～1枚のコインがつなぐ過去と未来～」を開催しました【平成29年4月11日(火)】

平成29年4月11日(火)、総合情報メディアセンター・メディアホールにて、シンポジウム「愛媛とロシア・オレンブルグの交流～1枚のコインがつなぐ過去と未来～」を愛媛大学、愛媛県、坊っちゃん劇場の主催及び松山市、東温市の後援で開催しました。

本シンポジウムは、今回、愛媛県がロシア連邦オレンブルグ州から産官学訪問団11人を受け入れたことを機に、これまでの松山とロシアの間の歴史を振り返りつつ、今後の愛媛県とオレンブルグ州の地域間交流の可能性と展望について考えることを目的として開催されました。シンポジウムには本学の学生、教職員、市民など約80人が参加しました。

それぞれの講演者からは、オレンブルグ州、オレンブルグ大学、オレンブルグを舞台とする文学作品について紹介があったほか、日露戦争時にロシア兵捕虜を松山で受け入れた歴史や、坊っちゃん劇場によるミュージカル「誓いのコイン」のオレンブルグ公演、そしてそれをきっかけとする愛媛県とオレンブルグ州の交流について報告がありました。このうち、教育学部の青木亮人准教授は、日露戦争中、松山では4千人～6千人のロシア兵捕虜を受け入れ、市民とロシア兵の間で様々な交流が行われていた状況を解説し、東京ロシア語学院の藻利佳彦学院長は、松山市の捕虜収容所にオレンブルグ出身の将校が2人いたことを紹介しました。また、オレンブルグ州訪問団団長のエブゲーニア・シェフチェンコ同州文化・外交関係大臣は、日露間の人的交流の重要性を強調し、オレンブルグ州と愛媛県の間でも文化・学生・スポーツといった側面で若い世代を中心に交流を拡大させたいと述べました。

質疑応答では、ロシアでは教育現場において日本のことがどう紹介されているのかという質問があり、オレンブルグ州では日本語・日本文化に対する関心が高く、柔道が盛んに行われていることや、オレンブルグ大学日本情報センターが日本語教育や日本文化の発信を担っていることについて説明がありました。

シンポジウム後、訪問団は愛媛大学ミュージアムを視察し、松本長彦館長からスポット展示「愛媛とロシア・オレンブルグの交流～1枚のコインがつなぐ過去と未来～」(※)について説明を受けました。

本学はオレンブルグ州の基幹大学であるオレンブルグ大学との間で、2016年10月に学術交流協定を締結しており、今回の訪問団にはスヴェトラナ・パンコーヴァ副学長と日本情報センターのリュドミーラ・ドカシェンコセンター長が参加しました。今後、オレンブルグ大学との間で、短期学生派遣・受入やスポーツ交流などを推進していく予定です。



講演するシェフチェンコ大臣



質疑応答の様子



講演者等の集合写真



愛媛大学ミュージアムを視察するオレンブルグ州からの訪問団

※スポット展示

「愛媛とロシア・オレンブルグの交流～1枚のコインがつなぐ過去と未来～」について

開催期間：平成29年4月7日(金)～5月8日(月) (休館日：毎週火曜日)

場 所：愛媛大学ミュージアム エントランスホール (入場無料)